

不二子嬢と大河内の二人は勿論のこと駒子嬢も那須も恐ろしい「明日正午」といふことを意識してあだが、それが何だかさうさし迫つた問題でないやうな気がした。もつと本當な所をいふと、明日の正午までには何か豫期しない事柄が起つて不二子嬢を救助するであらうと漠然とした考へを持つた。それで不二子嬢を初めその他の人々も一寸のがれに氣を樂に持つたやうである。彼等は晝食後しばらく経て宮殿の方尖塔へ登つた、そして天國にもつと一層接近したことを感じた。彼等は稜堡の廣大な塀に凭りかゝつて午後の太陽に照らされて黄金色化した遙かの海上を眺めた……海上には無数の鷗が上下左右に飛び亂れて落花を散らしたやうに見えた。一行のものは誰いふとなくみな思つた。「緑の空に緑の空に、加へるに緑の希望、三つの緑が合奏して今日只今といふ管絃樂を作つてゐる」彼等のいづれの胸にも將來を信ずる信念と不可能が可能となる希望に溢れてゐたのである。彼等はただ「今日只今」を信じて眞理の道を歩いて疑ふ勿れあるのみだと思つた。然しそれでも彼等は「明日正午」に對して身震ひせざるを得なかつた……不二子嬢と大河内は心のなかで叫んだ。「どうしてそれを切りぬけよう」

第十七章 墳墓の地下室

足の軽い羽の生えた風は傳令使である。風は「もう直ぐ夜になります」とカラ山を告げ廻つた……薄暮は灰色の長い旗を靡かして王城の大女關へ早や到着してゐる。薄暮は太陽が歩いて行つて空虚になつてゐる道を歩いて來たのである。

大河内は今那須の部屋窓にもたれて、山の絶壁を見下し眼をメッドの町の方へ移して今更のやうにこの山の高いのに驚いてゐる。そして彼はどういふ工合で夜がやつて來るかを注意してゐる。彼はいつの間にかやらメッドの町を離れた森林や谷合が一面に濃霧に蔽はれたやうに薄黒い幕が被つてしまつてゐるのに氣がついた。その時々方の影が恰も香爐からたち上る素早い香氣の煙のやうに、上へたち登り左右に分れ漸次にメッドの全市を薄暗くしてゆく有様を眺めた。そして彼は獨語した。

「流石女はみな詩人だ……不二子嬢もいいことをいつた。夜の眞暗に模様がついてるといつたが、面白い、如何にも女性らしい觀察だ……女はすべてを自分の趣味に近い着物に譬へたのだ。不二子嬢はいつた、「ほら、あそこに花が咲いてあませう。眞暗でその模様がお分かりにならない、随分あなたのお目は悪いのね。ほら、あそこに星が出てあます……これは誰にも分るでせう。それから今度は少々分り悪い模様ですが、薄黒い羽を生やした蝸斗のやうな恰好の魂魄といふ模様なのです。そのふわりふわりと浮いてゐる様子がいい模様となつて夜の幕に染まつてあますね」彼女がこんなことを話のなかにいつたが、僕は彼女は詩才があると思ふ」

大河内はこんなことを考へて獨り微笑した。そして彼は首を肩越しに後へ傾けて部屋のなかを見渡すと、薄暗い影が床の上になみなみと流れてゐるのに注意した。そして彼は耳を敬てると、帳の間や窓掛のうしろや椅子や机の下で幽かな聲で耳語するものがあるやうに感じた。實際にこの宮殿のいづ

ここにも箇人的耳語が潜んである。彼はそれを思ふとアラン・ポアの「幽霊宮」を思ひだされた。ポアの詩を讀むと「されば今この谷合を旅する人は、赤く輝く窓よりして見る、茫漠たる形を」と書いてある。

「……それは奇異な姿に動く、
亂れし調子の音につれて。

また魔の流れの如く急に、

蒼白き扉を排し、

見悪き悪魔は永劫に進出し、

且つあざ笑ふ……されど最早や微笑は歸らじ。」

このカラ山上の王宮にはあざ笑ふ悪魔の形相は見えないであらうが、確に幽霊屋敷の感なきを得ない。幽霊のやうに抜き足さし足で歩き廻る耳語の風は空虚な部屋や廣い廊下や或は地下深い死の靈屋に満ち満ちてゐるやうに思はれた。思へば物凄く薄氣味の悪い大伽藍である。

この時宮殿の静寂をばちりと破る音がどこからか響いて來た……それは後藤辯護士と福原夫人とが夕飯前の時間潰しに碁を一つ打つて盤面に石を置いた音であつた。このばちりの音に急な小さい笑聲

が續いた。それが小唄の氣まぐれな節奏のやうに響いた。また誰かが婦人服の笹縁を冷やかな石の壁へ釘づけにしよとする金鎖の音のやうにも響いた。するとその笑聲に答へるものの氣色がした。大河内はそれから人のその部屋へ入つて來たやうな音を感じた……この人は女であつたであらうといふのは、柔かい絹擦の音が響いたからである。この細い音が消えた後は寂として何の音もなしであつたが、その寂しさそのものが夢遊病者のやうに自分の覺音を味ひ楽しみながら宮殿中を歩いてゐるのである。大河内は今まで凭りかゝつてゐた窓を離れて後を向くと、廊下へ出る所の戸が風もないのにはたんと音して動いてゐるのに注意して、閉ぢて仕舞はうと思ひながらその方へ歩いた。

彼は戸の方へ機械的に部屋を横切つた。この洞穴のやうな感じを與へる部屋の床に薄暗い極めて微弱な光が漂つて溫和な神秘的な印象を與へた。彼は今戸の鍵に手をかけてそれを締めようとする時戸の前をすつと通りぬけて陰鬱のなかから陰鬱のなかへと消えて行つたものがあつた。そしてそれが廊下の柱から柱とへ動いたが、その歩き方が素早い割には周圍に微細な注意を拂ふといつたやうな點も見受けられた。それで大河内は直にそれが怪しい舉動の奴と睨んだ……そしてこの廊下をこそこそ急ぐ奴は誰でもないマラであると彼は直感した。

大河内は音のしない嫺かな上草履を穿いてゐたが、上着は取つてゐた。といふのはジャボに頼んでそれに火熨斗をかけて貰つて居つたからである。それでジャボはそれを次の部屋へ持つて行つた。那須は何の用事があつたか分らなかつたが、彼も自分のコートを部屋の椅子にかけ放しにしたまま、次

の部屋のジャポと話しこんでゐた。大河内はマラの廊下を滑つて行つた姿を見て直に追ひかけなければならぬと思つた時、急に寒さを感じたが自分の上着がなかつたので、那須の上着を纏つてマラを追つた。もとより大河内がどうマラを疑つたといふ譯ではなかつたが、兎に角マラは不思議な存在として大河内に顯はれてゐた。大河内はマラが素早く狡猾にこつそりと駆けてゆくやうに自分もその歩調と合せてマラの後を追つた。

廊下にはだれ一人の人間もゐなかつた。早や夜の暗黒がそこを占領してゐたので、マラも大河内もそのなかを荒立ずにやんぱりと靜かに滑つた。マラは眞直な廊下をしばらく歩くと、右へ廻ると狭い小さい部屋へ入るのであるが、マラはその小さい部屋へ入つた……大河内は彼の行く通りに彼を追つた。部屋の床はつるつると黒光りして恰も深い谷合の水溜りのやうな感じを大河内に與へた。頭をあげても天井がどこにあるのだから見當の分らない高い建物の上から、投げるやうに落ちる暗い影を受けてこの黒光りする床が、一段の物凄さを増すやうに思はれた。この部屋の右手に階段があつて、それが直に部屋の壁のなかに入つてゐた。そしてこの階段を上つて行くと以前は古代の鎧兜の入れである武器庫であつて今はがらくた道具の捨所となつてゐる部屋へ入るのであるが、マラはこの階段を上つて壁の彼方に出るや直に右の方へ廻つた。その様子が餘りに敏捷であつたので、後を追つてゐる大河内には彼の汚い色の着物が動いた有様だけしか見ることが出来なかつた位であつた。大河内はマラの奴何處へ一目散に眞暗のなかを急ぐのかと思ひながら、蹙音をさせないやうに歩いて追つて

ゆくと、マラは三角の穴が壁についてゐて、彼はそのなかへ潜つて行つたのである。丁度その穴を譬へると壁が欠伸したやうな恰好であつたが、大河内はそのなかへ入るには非常に窮屈を感じた程小さかつたのである。

然しこの三角形の穴は最初は極めて窮屈であつたが、しばらく這ひずつて行く間にやや廣い道路みたやうに思はれて來た。彼は兩手を左右に延がすと苔の生えてゐると思はれる石の壁に觸れたのである。大河内の最も苦痛を感じたことは、先に急いでゆくマラが着物で通路の芥や塵を拂つてゆくので、狭い所が眞暗のなかでさへ濛々と塵煙が一杯であると思はれ息さへ樂にする事が出来なかつたのである。彼はここは或は土の牢へ通ずる道であらうと想像した時、愈々マラの行爲が怪しくならざるを得なかつた。その時大河内は前の方に青白い焰がびかりと光るのを見た……マラが小さい蠟燭を點したので、彼はこの狭い道路も左程歩くに困難なものだとは思はなくなつた。

今大河内は息を殺しマラに見付からないやうに注意して彼を追つた……彼は無難作に石を挽割つたやうな壁の前を通つた、大きな石を削らずにそのまま柱とした所を通つた。彼は道を廻つた……彼は思つた。この穴の道は何のために作つたものか。ジャポはこの道のあることを知らないであらうか。若し彼が知つてゐたならば、なぜ今朝この穴道へも案内しなかつたであらうか。若し彼がこれを知りながら案内しなかつたとする、彼自身も今朝の搜索が決して完全なものでないことを承知してゐる

答た。自分等が彼の心を疑つたにしても、彼はそれを申開きすることが出来ないであらう。實際ジャボがこの道を知らないとすると、不二子嬢がそれを知る譯がない。兎に角この地下道こそ不思議である。今しばらくマラの後を追つて行つたならば、必ずや何かを発見するに相違ない。大河内は冒険心を振り起した。彼の疑念は彼の心を刺戟した。彼は恐怖に震へながら一種の快感なしではなかつた。彼は恐らく照人王はこの地下に隠れて居られるに相違ないと思つた……然し照人王は生きて居られるだらうか。そしてこの狂人マラはどうして照人王のここに居られることを知つてゐるか。彼は照人王の失蹤事件には大關係を持つてゐる。然し若し大河内がマラに追跡してゐることを悟られたならば、或はマラは彼に最後の秘密を示さずに胡魔化してしまふかも知れない。そしてまた大河内が今ここでマラに打棄られるかマラの姿を見失ひでもするならば、恐らく大河内は再び地上へ出て來ることが出來ないであらう。故に大河内は大事に大事を取つて、音一つもさせず息をするにさへ遠慮に遠慮をして、マラにけどられないやうに後を追つた。

大河内の全神経は追跡といふ目的だけに集中して、彼がどうこの秘密の道を急いで行くかを意識するだけの餘裕を持たなかつた。それでも彼は臆氣ながらもどういふ風にマラを追つたまた今現にどこで彼を追つてゐるかを知つてゐる……彼は二度道を廻つた。彼は得體の知れない偶像の斷片を入れてある壁龕の前を通つた。彼はこれを信州善光寺本堂の地下室めぐりに比較するとどの位複雑な恐ろしいものであるかを思つた、彼はかうしてずんずんと前へ進んで行くカラ山の奥の眞中へと潜り込んでゆくであらうと思つた。

彼は今段々と狭くなつてやつと體が入る位の所へ來た。そしてその道が終結して短い階段になつてゐた。マラは疲れた足をそれに踏みかけて上つてしまつた……大河内はマラが階段上の壁の前に立つたのを見た。マラはこれからどうするだらうかと見てゐると、彼はその壁のある部分の石を手でぐいと後へ措した。するとそれが音を出さずにするすると後の方へ動いて大きな穴がその壁に開いた。マラはその穴へまたもや潜つて入つた。大河内は彼の入つてしまつたのを見すましてその後を追つて穴へ入つた……

部屋は小さかつた、天井は低くかつた。部屋の眞中に柱があつてその周圍に柱なりに曲つた長椅子が置いてあつた。それからそこに小さい机もあつて、その上にきらきらした燐光性や微光性の鑽石が電球や捲管や垣塙などと一緒に置いてあつて、玉子の殻や鳥の羽や象牙や紙などがその周圍に散らばつてゐた。然し大河内をもつともつと驚かしたものがあつた……それは上記のものなどの場所を少々離れた所にあつた寶石の閃光であつた、寧ろ千箇の寶石が一つに集つて放散した閃光であつた。この閃光が不思議な光の重吹を投げ飛ばし、時にはそれが燻り時にはまた急に燃えあがり、時にはそれが身震ひし、時にはまた激怒の光とさへいふことの出来る靈光を發砲した。そしてこの驚くべき寶石は彫刻のある小さい箱から飛び出してゐたのである。大河内はこれを見るなり直感して叫ばざるを得なかつた。

「あゝ、これだ、ヤクキ島王世襲の寶石はこれだ！」

然しどうして狂人の老マラがこの寶石の所在を知つてゐたであらうか、大河内はそれが解けない謎だと思つた。彼は部屋隅に體を小さくして蹲み込み、息を殺してマラがここで何をするかを見詰めた。マラは長い震へる蛇のやうな指先でそこに散らばつてゐるものを弄つた。彼は手に小さい管で齒磨のチューブのやうなものを撮んで、掌の上に載せた。大河内は心のなかで叫んだ。

「ああ、あれだ、彼が昨晩手のなかに持つてゐた柔かい金屬性の管は……」

それからマラは机の上にある鑽石類を眺めたり、垣塙のなかを見たりした。そして彼は前記の彫刻のある小さい箱のなかから寶石の首飾や過去の皇后陛下達が額にお付けになつたと想像される黄金の飾物等を取り出した。大河内はここに於てますます驚かざるを得なかつた……マラはそれ等を指で弄つたり、掌の上に置いたり、考へたり微笑したりまた眼を閉ぢたりした。その舉動はいよいよ不思議であつた。大河内は思つた。「ヤクキ島人が今無くなつたといつて大騒ぎをしてゐる寶石はここにゐる。そしてマラといふ狂人だけがそれを知つてゐるとは奇怪極まることだ」

この時大河内はリタニ宮殿の晩餐の席上でバラトル長官が彼にいつた言葉を思ひだして來た。長官は彼にいつた。「マラは毎日メッドの町なかをメレ、メレと怒鳴つて歩くさうです。このメレといふ言葉はヤクキの土語で王様といふことなのです。照人王の見えなくなつたのを大變心配して、王様を深して歩くといふつもりなのでせう。」それから不二子嬢がマラに關していつた言葉も胸に浮んで來

た、彼女はいつた。「何でもマラといふ言葉が鹽とかいふ意味ださうで、この老人がいつも泣いて歩いてゐるといふ所からそんな名前が付いたともいつて居ります。」

大河内は照人王失踪真相の鍵はマラの掌中にあると思つた時、彼の希望は勇氣づいた。然しマラが王様の友人であつたならば、ヤクキ島の人々がそれを知らないといふのが不可解のことだと彼は思つた。それからまたマラが直接の下手人として照人王に危害を加へたものとも思はれなかつた、なぜならば彼は老耄れ疲れた人間であつてみると人を殺すなどといふ大それたことが出來さうになかつたからである。問題はますます紛糾して來るの感があるが、大河内は希望の焰が幽かながら暗黒を照すやうに感ぜざるを得なかつた。「マラこそ照人王の所在を知つてゐるに相違ない、そして彼こそ島の寶物を不二子嬢の手にかへして父王様の汚名を雪ぐことが出来る」と大河内が思つた時、彼は一思ひにマラの面前に立ちあがり、彼の喉笛を絞めて全部を白狀させようかと思つた。彼が今指で弄つてゐる寶石箱をその手から奪ひかへし直にこの秘密の地下道を離れて不二子嬢を呼ばうかと思つた。然し大河内は考へた……「いや、待てよ、寶石箱は明白になつたがまだ照人王はまるで不明だ、王様の絲が出て來るまでは彼を驚かしてはいけない……彼がこの次に何をするかを見て居らねばならない」かう彼は思ひながらマラの様子を見てみると、マラは手に弄つてゐた故皇后陛下の首飾や王冠を側に置いた、そして部屋中央にあつた石の大きな柱にくり抜いてある一枚の石戸をこち上げた。マラがそのなかへ消えて行くのを見るや直に大河内はこれまで隠れてゐた隅を離れて、柱の前の机へと進んだ。彼は

机の前に立つた。彼は柱のなかを見た……

柱のなかに三段の階段があつて、マラは今それを上つて階段の上にある戸を開けた……戸はぎいと軋る音がして開いた。大河内はマラの後を追つて柱のなかへ潜り込み、階段を登つて戸の彼方に出た。マラは手に小さい蠟燭を持つて暗黒のなかを進んで行つたが、彼は今ヤクキ鳥を支配した様々の王様が眠つて居られる墳墓の部屋のなかに立つてゐるのである。大河内はマラの後から續いてこの部屋へ出て来た、そしてこの時心のなかで叫んだ。

「この圓柱形の一本石は見覚えがある、ああ、さうだ、これは今朝ジャボの案内で見て置いたアリバル王の墓碑だ。」

マラはアリバル王の墓碑の反対側へと急いで横切つた、そして彼はそこにある空虚の壁龕の前に立つた。大河内は思つた。「それは今朝ジャボから聞いてゐる現王照人陛下が崩御せられると葬られるといふ所だ」マラはこの空虚の壁龕の前に坐つて、手に持つてゐる蠟燭を側に置いた。彼は両手を高くとあげて禮讃するかのやうな表情をした。彼は恭しく頭を垂れた。彼は一言も發しなかつた……彼は如何にも疲勞し切つたやうに見えた。蠟燭の火は彼の髪毛を照らした。彼の手はぶるぶる震へてゐた。

大河内は断然と思つた。

「王様殺しはマラの行業だ。マラは照人王を殺害した、そして彼は狂氣したのだ。それに相違はない

最早や疑ふの餘地なしだ。」

大河内は今や躊躇してゐる場合でないと決心して暗黒のなから飛びだした。彼はマラの肩をぐいと掴んだ。

「マラ、白状しろ、貴様は王様をどうした……殺したのだらう！」

マラは頭をあげた。

彼は大河内を見上げたが、その態度は少しも驚いたといふ様子がなく極めて靜かなものであつた。恰もいろいろの亡霊や幻に頭腦を損はれた人間のやうに、彼には現實が如何に奇怪なものでも何の關係がないといふやうであつた。マラの眼は大河内の眼と立會つた。マラの臉はぼちくりと動いた。マラは兩眼を下へ落とした。

「王様……私が王様を打棄つたのでない、王様が私を捨てて行つてしまはれたのだ。」

かう彼は叫んだ、そして彼は大河内の手を振り拂つた。彼はよるめきながら壁龕の前を立ち去らうとした。大河内はマラを妨げようとした……マラは立ちあがつたが直くぼつたり倒れた、彼は長い體を壁龕の前にながながと延べて横になつた。

大河内は蠟燭の火を手を持つて横に倒れてゐるマラの側に近寄つた。彼はマラの様子をぢつと見詰めた……正しく死が彼に接近しつつかあるやうに感じた。大河内はマラの胸の動悸が普通でないことを知つた。彼はマラの汚衣着物を掴みそれを弛めて喉のあたりを開けた。彼は手首に指を當てその脈搏

に觸れた、彼はそれが極めて微弱であることを感じた。彼は手を彼の額に當てて見た。彼がマラの驚くべき状態に瀕してゐることを知つた。彼は心のなかで思つた。

「これは大變なことになつた……然しどうすることも出来ない。那須やその他の人々は何方にゐるか。呼んでも叫んでも何にもならない。それにここから地上の部屋へ出る方角も知れない。ああ、どうしたらばよからう、困つたことになつてしまつた。」

彼はこの時自分が着てゐる那須の上着の内懐の中に何かかちんと手に當るもののあるのに氣がついた。彼ははてなと思つて、手を入れてそれを引きだしてみた……それは花瓶のやうな恰好の小さい葡萄酒の徳利であつた。

徳利は玉髓から作つたもので上に金紙の賞牌が張つてあつた。そして賞牌の構圖は變化に富み美を極めたもので、注意してみると構圖が猿や蛇や獅子と戦つてゐる勇士や神聖な樹木などを配置して出来てゐた。大河内はそれを眺めて豫期しないものが出て来たものだと思つた。「那須はどうしてこんな葡萄酒の徳利を持つてゐたであらう。随分これは不思議なことだ」と彼は呟いた。然し彼はまたかう思ひかへした「これは那須がルタニ宮殿で貰つたものに相違ないが、過去二日間は何事か連続的に起つて餘りに忙しかつたので、彼はそれを自分に話すことが出来なかつたのであらう。恐らくこれは驚くべき古酒であるのに相違ない」

大河内は徳利の栓を抜いた。するとその瞬間にびんと骨に染み込むやうな甘い香氣が立ち登つて、部屋の死したやうな空気を俄に甦らすやうに彼は感じた。彼はしばらくの間茫然としてゐた。彼は叫んだ。

「これは三千年以上の葡萄酒に相違ない。この香氣はどうだ、この強いことはどうだ。この香氣を嗅いだだけで骨身がひつくり返るやうだ。恐ろしい名酒だ……那須はどうしてこれを持つてゐたのだらう、ああ、不思議なことだ。」

大河内はこの瓶を唇に當て舌で嘗てみた。彼は驚くべき奇異な靈液に觸れたやうに感じた。彼は一種の確信を得それに動かされたのであらうか、何の躊躇する所なくその葡萄酒の瓶を眼前に横たはつてゐるマラの唇に押しあてた。

マラは顔を痙攣的に瞬かした、息をながく吸ひこんで身震ひした。彼は手や足を二三度動かしたが、それだけで後は石の床の上に靜かに横たはつた。大河内はマラの着物の胸を擴げて手をそのなかに入れた、彼の心臓の鼓動は急に激烈になつたが驚く程規則正しいのを感じた。マラは生氣を恢復して来るやうに見えた……彼は大きな呼吸をして胸を波だたせたが、それは一瞬間のことであつた。彼は顔を再び閉ぢてしまつた。大河内はマラの上へ踞んで彼の靜かな顔をちつと覗きこんだ。

大河内は膝まづき蠟燭の火をまげて、マラの顔をさまさまと眺めた。大河内の當惑は段々と深くなつて行つた。彼がこの時マラに對してどう思つたかは明瞭に言葉で語ることが出来なかつた。マラがこれまで被つてゐた不思議な假面は薄らぎ消えて行くやうではあつたが、なほ隱蔽の惡戯から離れる

ことが出来なかつたやうに見えた。然し漸次に彼は隠蔽しながらも暴露して來るといふやうな形で、彼の姿に隠蔽と露出との二つが争つてゐるやうであつた。彼の肩を見ると赤味を帯びてゐた、そしてその赤味がマラの變化した顔に染みてゆくやうに思はれた。ああ、マラの變化した顔……實に彼の顔は變化した。然し大河内は彼が如何に變化したかを語ることが出来なかつた。彼はマラをぢつと眺めた、目をこすつた、彼は兩眼を暗黒の方へ向けた。そして再びマラを眺めた。彼は蠟燭の火をあげてマラをよくよく見詰めた、然し彼は如何にマラが變化したかを説明解釋することが出来なかつたのである。

彼は蠟燭の火を床の上に置いた、そして靜かに横たはつたマラの體を飛び退いた。彼は周圍を見廻して、如何にこの墳墓の地下室が靜まりかへつてゐるかに驚いた……實際寂寞が彼の骨身を嚙むやうに感じた。そして彼はいふまでもなく暗黒のなかに立つてゐる。ただ石棺の肩とでもいふことの出来る四隅の所が白く見えた外は眞暗であつた。彼は再びマラの横たはつてゐる所へ近寄つて、手を彼の額の上に置いた。大河内は蠟燭の幽かな光線を受けてマラの體の周圍に青白い空氣が輪を描いてゐるやうに感じた。大河内はマラの肩に觸れて揺ぶつて見た、然しマラは何とも答へる様子がなかつた。

大河内は叫ぶやうに獨語した。

「酒のためだ……僕が彼に飲ました葡萄酒のためだ。何といふ恐ろしい葡萄酒だ。」

彼は僅にこの玉髓の葡萄酒瓶に觸れたに過ぎなかつたが、それでも彼の血管に血が飛び廻り足拍子

高く踊つてゐるやうに感じた。不思議に氣分が浮きたつて何とも言へない躍動を覺えた。彼は周圍の墳墓を見廻した……幽かな灰色があつた光がそれ等に落ちてゐた。大河内は薄氣味悪い笑を洩した。勿論彼はそれが何を意味するかを知らなかつた。しかし彼はかう思つたに相違ない。「ここに眠つておいでになるアリバル王様でもミチゲン皇后様でもこの不思議な靈酒をお飲みなされたならば、必ずや彼等の石碑は動きだしその下から物を仰るであらう。アリバル王陛下はマレー半島を一嘗めになされた雄姿そのままの姿で鎧兜いかめしくお出ましになるであらう。またミチゲン皇后様は武内宿禰の手紙を入れた手箱を提げながら『随分寝たわね』とか何とか仰つて顯はれ給ふであらう。然し宿禰の貢要求の手紙では面白くない。それが彼の皇后様へ贈つた戀文であらうものなら小説物だがな、惜しいことをしたものだ」大河内は再びマラの側に坐つた、そして彼の頭を自分の膝の上に載せた。大河内はマラの顔と蠟燭の火に照らししてしみじみと眺めた。彼の手に持つた蠟燭の火は揺れた、ぼつと飛んだ。大河内の手はぶるぶると震へてゐたのである。

疑もなくマラの顔や喉や青白い手が神祕的な變形を演じつつあつたのである。マラの灰色の顔は今恰も新しい血の侵襲を受けつつあつたやうである。彼の青白い手は今や恰も新しい力の補充のため確かになつたやうである。彼の筋肉は強硬になつた、彼のこれまでの皺くちやだらけな額は火熨斗をかけたやうに滑かになつた、彼の肩はなまなましく成つた。大河内は思つた。「今にマラは物を言ひだして來るだらう、彼がうんと唸つても自分は驚かない」マラは文字通りに青春を回復したか

のやうに見えた。

大河内はマラを離れて石の上に坐つた。彼は無言であつた、また微動だもしなかつた。そしてマラを少し離れた所から眺めた。マラの額に小さい青い血管が枝を出して横に竝んでゐた。またそれを縦に横切る線もあつた。そして彼の鼻の上の二つの眼の間に亀裂があつた。然るに今はそれ等が消えてしまつてつるつるになつてゐる。彼の頬も赤い色が潮のやうに満ちて来て、着物の前がはたかつて喉から胸を露出してゐたが、その邊も確かりとして来てゐるやうであつた。大河内はまたもやマラに接近して彼の腕を掴んでみた……最早やそれも萎びてはゐなかつた。彼の姿は今は決して老人のそれではなく立派に青年の恰好である。ああ、これはどうしたことか、これは何を意味するのであるか……大河内はぢつとしてゐた、血が自分の額に集つたやうに感じた、そして自分の眼が濃霧で蔽はれて來るやうに思つた。ああ、これはどうしたことか。

全然意識を失つたマラは少しも體を動かさなかつた、又眼も開けなかつた。瞬間は足を曳きするやうに動いて行つた。大河内は二度も三度もマラの胸に手を當てた。彼はマラが音律的に力強く動悸打つてゐるのを知つた。彼は側に顔を向けた。彼は驚く程變化したマラを見る事が恐ろしかつたからである。彼は恐怖に掴まれて理性を失つた。彼は今自分が發狂したのではあるまいかと想像した。彼はマラの側を飛び退いて、部屋の物凄い暗黒のなかへ剛毅な態度を作つて歩いて行つた、そしてマラの變化は自然なものだと自分に言つて聞かせた。マラはもともと病人で營養不良であつた所へ急に葡

萄酒を飲んだので生氣が恢復したのだと彼は自分に説明した。然し自分はそれを信ずるでもなく信じないでもないやうな素振りをしたと思つた。兎に角彼が現に今見てゐる所のものをどう解釋説明していいか彼の知る所でなかつた。

彼の聲音は異様に石の床に響いた。彼はそれを聞いて驚いた。部屋のなかの冷い空氣が彼の動くたびに毎に彼の顔を打つた。彼は敷石の滅茶々々になつてゐる床の上に躓いた。彼は石棺のぎざぎざになつた縁の上にのめつた。彼は暗黒といふ怪しい腕で撃たれたかのやうによろめいて千鳥足になつた。蠟燭の幽かな光線は壁の上に落ちて、陰鬱を變じて汚い岩にくつ附いてゐる蘭の花の青白さとするやうに感じた。大河内は蕃紅花や野生の莓が疎らに生えた青い傾斜地を知つてゐるが、それが自由な空の下に横たはつて蘭の畑のやうに見えたことを心のなかに浮べた。彼がその青い傾斜地で寝そべつてゐるのでなく、現にこんな幽靈の花が咲き亂れてゐる憂鬱な墓地のやうな部屋にゐるといふことは、實に運命といふ奴に翻弄されてゐるのでは有るまいかと想像した。アリアル王様の圓柱碑の周圍に怪しい微笑が漂つてゐる……それは何を大河内に暗示しようとするのであるか。彼はそれを恐れて近寄るだけの勇氣を缺いた。彼は兩眼を閉ぢて時の一刻も早く經過し行くのを願つたが、もとより彼がどういふ救助を豫期してゐるかの意識さへ明瞭でなかつた。彼は臆氣に想像するやうな氣がした。「マラがあんなに變化したならば、自分も何か異つた形に變化しないと限らない……もつと汚い見悪い恰好の男になつたらばどうしようか知らん」彼は剛然と立ちあがつた、そして握拳を作つて暗黒

を打たうとした。すると彼自身の箇性がするつと逃げて行くやうに感じた。ああ、大河内は遂に發狂したであらうか。彼は自分自身に狂人になつたやうに感じた、そしてそれを歎いてゐるやうな聲で自分に聞くやうにさへ思つた。彼が狂人であつても無くても、彼は幽かな瞬く蠟燭の火の側で横になつてゐるマラは恐ろしくて再び見詰めることが出来なかつた。

然し彼は大決心で蠟燭を取りあげマラを覗いた……所謂怖いもの見たさといふ奴であつた。マラの顔は益々變化して行くやうに思はれた、恰も秋の空が瞬間ごとく變化してゆくが如くであつた。マラはどう變化したか。驚く勿れ彼は今正に五十歳位の男子の容貌となつてゐたのである。

大河内は手に持つた蠟燭を落とした。蠟燭の蠟は石の床の上に流れた、そしてそれに火がつき蠟燭臺が煙をだして燻ぶつた。彼は兩手で眼を蔽つて蠟燭の側を飛び退いた。彼は思つた。「若し彼が發狂してゐるならば、それはいふまでもなく玉髓の瓶の葡萄酒に唇を觸れたからである、さもなければ自分がこんな發狂する譯がない」彼は獅子を強いと思つてゐる、それ故に若し彼が床の上に横たはつてゐるマラを肩に背負つて眞暗な階段を登り、彼がこんな有様に變化したから見て御覽なさいと不二子嬢を初めその他の人々に叫びたいと思へば、それは決して困難なことでない。彼等がマラを見て何といふであらうか。特に大河内は不二子嬢の意見を聞きたいと思つた。もう今時分は晩食も終つて不二子嬢駒子嬢並に福原夫人に後藤辯護士の四人は大理石の應接間へ引上げてゐるであらう、そして不二子嬢と駒子嬢との笑聲は宮殿に響き渡つてゐるであらう。然し彼は思つた。「彼等の世界は自分

の世界でない、遠い遠い異つた世界であるやうな氣がする、そして自分は故意に彼等の世界から離れたが今更そこへ歸ることが出来ない」所で彼等の世界はどこにあるかといふに、實際すぐ頭の上にある、彼等の家の屋根も大河内自身を蔽つてゐる家の屋根と同じで異つてゐない。それでゐて彼と彼等とは異つた世界に住んでゐるのである。彼はこの地下室で發狂してゐるのである。

大河内は悲鳴をあげた、そして自分が着てゐた那須次郎の上着を脱いだ。それを彼がマラに投げつけた。それから大河内はどうしたか。彼は眞暗な廊下を目掛けて飛びだした。大河内は蠟燭の火はそのまま後に残して置かねばならないと思つた、といふのは死人に蠟燭は付きものであるからである。「死んだ人間を暗闇のなかに獨り打棄つて置く譯に行かない、その上に自分が發狂してゐるとすると狂人は昔から眞暗のなかでもよく目が見えるものだ」と聞いてゐる」と大河内は思つた。彼は疑ひもなく眞暗のなかの如何なるものでも明瞭に見ることが出来ると思つた。それで今彼はこの部屋を飛びだしても、自由自在に地上へ出る道を獨り見出すことが出来ると思つた。然し彼は大聲を發して友人達を呼び、マラが地下室の墳墓の間で死んだことを知らさねばならない。彼は大きな聲で彼等と呼んだ。そして彼はその次の瞬間に黙して靜かに石の上に坐つた……もとよりその石の上がどこであつたかを知らなかつた。彼の心は努力で満ちた、如何となれば彼はどうあつてもマラのやうに異様な變化をしたくなかつたのである。彼は思つた。「若し彼がマラのやうに變化したならば人は大河内は操人形と同じだと笑ふであらう……もとより他人が笑ふのはどうでもいいが、若し不二子嬢が笑つたと

すると、それは自分の堪へる所でない。彼は自分の叫んだ聲が地下室から登つて地上の部屋へ響いて行つたやうに思つたが、何の答を得ることが出来なかつた。それで彼はもう一度大きな聲で叫ばねばならないと思つた、如何となれば彼がここにあるといふことを知らせるのが急務であると同時に、彼等は是非共マラの變化した顔を知つて置く必要があると大河内は思つたからである。

大河内はせい一杯の聲を出して叫んだ。

「不二子さん、那須、ジャボ、ジャボ……ジ・ウジ、早く来て呉れ、何をぐずぐずしてゐる、こん畜生！」

彼はこの時ふとジ・ウジはアロハ丸に歸つてゐることに気がついて、「自分ながら馬鹿ばかり、もつと注意しなければいけないと思つた。そして彼は盲滅法に眞暗のなかを走つた……もつとより彼はどこを走つたかを知らなかつたが、突然眼前に戸がぱつと開いてそのなかから見事な光線がさして來るのを見たと思つた。彼はその戸のなかへ突進した、唸り聲を出して部屋のなかに倒れた……

彼は實際にどこに倒れたか。彼は眼前にアリバル王の不吉な石棺によつと顯れてゐるのを見た、そしてその石棺の側にマラの變化した顔が仰向きに横たはつてゐたのである。彼はこの時うねつた廊下をぐるぐる廻つたと思つた。ああ、誰か知らんそれは彼がヤクキ鳥を過去に支配した王様達の墓場の部屋を廻つて歩いたのである。

彼は自分分の體を無理に引きずつてマラが靜に横たはつてゐる方へ接近した。大河内は再び彼を見ねばならなかつた。もつとより彼は何故にさうしなければならぬか知らなかつた。彼は投げつけたままになつてゐた上着をつまみ上げた。彼は眠つてゐるマラを見た……彼は五十三四歳の立派な偉丈夫と化けてゐる。大河内はびつくり仰天してこの新しい恐怖を凝視した。彼は老耄れ老人の通夜に來て、その眠つてゐるのは老人でなく男振りの見事な人であることを見出したやうなものである。大河内はこの位不可能の事件がまたとあらうかと感じた。

大河内は手を機械的に死人の心臓に當ててみた。それが規則正しく力強くどきんどきんと打つてゐた。また呼吸も壯健さうにふつくりとした唇から洩れて聞えた。大河内は一二分間もその側に坐つた。彼の血は血管に湧くやうに流れるのを覺えた。彼は急に唸つた、そして石の床の上にはたんと倒れた。

大河内は翌朝十時頃に目を覺した。

彼は自分を見廻した……長方形の光線が面前に落ちてゐるのを見出した。彼は頭をあげて、この光線がアリバル王陛下の墓碑のなかから洩れて來るのであることを知つた。そして次の瞬間に彼は那須次郎が自分の側で大河内大河内と呼びかけるのを聞いた。それはいつもの彼の愉快げな聲であるのを知つて、彼は嬉しい涙が溢れるやうに感じた。那須はいふまでもなく驚愕したのであるが、大河内が

無事に発見されたことの歡喜を高い調子の叫び聲で表情した。那須はただ獨りであつた。彼はジャボを案内にしてこの地下室へ来たのである。

ジャボはつるつるした薄黒い皮膚の手を揉んで大河内の無事を喜んだ。

大河内は古い微びた石の上に幾時間も寝てゐたので體が冷え切つて硬くなつてしまつてゐた。彼は體を動かして目を擦つた、そして依前の恐ろしい死人が側にゐやすまいかと恐れた。また彼はそれは單に一場の夢に過ぎなくて形相の變つたマラも誰もゐるのでなかつたかも知れないと想像した。

彼は側を一目見渡した……彼が投げつけた那須の上着はそのまま、その下に人間の體が依然として横たはつてゐた。上着の下からよきつと二本の腕が飛びだした……大河内はびつくりした。二本の腕の所有者は那須の上着をはね退けた。

今起きあがつた男は若々しい立派な人で、その神經質な顔に比較的長い髪の毛が垂れてゐた。彼ははつ切りした臉を下へ落として周圍を見ようとした。彼は坐つたままぢつとしてゐた。

大河内は叫んだ。

「おや、あなたは……」

坐つてゐる男は靜かな驚愕の表情をした、そしてその表情が徐に好奇心といつたやうなものに變つて行つた。彼は兩腕を高くさし延ばして心持のよささうな欠伸をした、そして叫んだ。

「ああ、よく眠つた。こんなに熟睡したことは近頃珍らしかつた。」

ジャボは彼の顔を見るやいきなりその面前に膝まづいた。ジャボは頭を石の上に垂れた、そして叫んだ。

「陛下、陛下……どうしてここにおいでになりました。神様は可能をお許しになりました……」

第十八章 朝の訪問

リタニ宮殿は朝の光線浴を濟まして建物のすみずみまで清められ、如何にも無垢透明の感を人に與へる。特にその階上の部屋は太陽といふ大きな刷毛で大理石が雑巾がけられてその白色が一段の純白美を發揮してゐる。そしてここに溢れる空氣は大きな歡喜の豫感に満ちて、それをこそこそ囁する耳語に漲つてゐるやうである。有聲の音樂もいゝが無聲の音樂の美に優るものがないといふ言葉があるが、正に今朝のリタニ宮殿にはその無聲の音樂に満ちてゐる。何故にかくこの宮殿が精巧無比な凹彫された寶石のやうに輝いてゐるのか。宮殿の主人伯爵タビットが階上の部屋を歩きながら、世界はわが掌中にありといふ歌を低聲で唄つてゐるのであるか。

今日こそは彼が照人陛下の御息女不二子内親王といよいよ結婚する日である。宮殿は今その準備に多忙を極めてゐる。

部屋の壁は薔薇色ダマスクの小形瓦張りでその感じの柔かで壯麗なること譬へる言葉を知らない程である。床には今日如何なる動物園にも生きた標本の見出されないといふ稀有な動物の毛皮が幾枚も

敷かれてゐる。ここに懸つてゐる掛け毛氈は古い時代の工藝家が手腕を盡して織つたもので螺旋形の模様である。壁畫を見るとその圖に不思議な夢と地上の現實とが巧に結び合はされて、夢の方から見る現實のためにその實際美の一面を増し、現實の方からいふと夢のために壯麗を躍動させるところがある。圓柱は直線と純白の美とを表現し、天井は正方形の榊型に出来てゐて、その一つ一つに特殊の繪が描いてある。この部屋の上段へ登る階段を上りつめると、そこに小さい神龕が置いてあつて、中にスフィンクスの十字架にかかつた圖の繪がかつてゐる。一言でいふとこの部屋のすべての表現が一つになつてこの小さい神龕に禮讚の辭を呈してゐるといつたやうな形である。

伯爵タビットは今白い絹の着物を纏つてゐるが、それを近寄つてみるとそれに浮彫式の模様が付いてゐる。そしてどういふ模様であるかといふに、意味のわからないやうな呪文が圖案化されたものである……然し伯爵にはその意味が明瞭であることはいふまでもない。恐らくこの着物は古い時代の人が千人も集つて神を禮讚しながら織つたものであることは容易に想像される。この着物を纏つてタビット伯がこの部屋に立つたり坐つたりしてゐるのを見ると、如何にも彼がこの部屋にびつたり當嵌つてゐるやうである。彼は部屋のために作られ部屋は彼のためのみに存在するといふことが出来る程お互によく合一してゐる。彼は今神龕に朝の祈禱を捧げるため、前記の階段を徐に登つて行くが、その有様はすべての知識を支配する人間といふよりは寧ろ謎を考へてゐる小兒に似てゐるやうに思はれた。

彼は神龕に膝まづいて呪文を誦へてゐる。

『金と銀こそ尊けれ、

これ宇宙を貫く血潮なればなり、

銅と鐵とを輕視する勿れ、

これ大地の動脈靜脈なり、

神よ、われ金となり銀となり、

銅となり鐵となり、

すべての完全を誓ふなり、

われ闇黒を恐れじ、死をも恐れじ。』

タビット伯は二度も三度もこの呪文をくり返した。そして彼は附け加へた。

「私は眞理の探求に世界の果まで行くを恐れませんでした。實際に私が力の限りを盡しませんでしたか。また私が勝利をあげることができませんでしたか。」

この時一青年が伯爵に近づいて歩いた。それは嘗て大河内一行が深川新網町訪問の際、戸を彼等に開いてなかへ彼等を迎へた青年であつたのである。彼の態度は伯爵に對する默從そのものであつた。

彼は身を踞めて歩いて伯爵に最大敬意を表はした、彼は臉を上向かせて伯爵を見上げることさへ遠慮してゐるやうであつた。

彼は低聲ではあつたが明瞭な言葉で通告した。

「女王殿下と福原夫人に後藤辯護士、それに駒子嬢の四人のお方が閣下にお目通りを願ひたいとおいでになりました。」

伯爵は彼をふりかへつて見た。

「何か？」と彼は青年に尋ねた。青年が四人の名前を繰返した時伯爵は一寸考へた……彼は何の用事があつての訪問であつたかを了解することが出来なかつた。彼は今世界が凹彫りの寶石となつて彼を讚歎してゐると信じてゐる際であつたから、何も別に問題が起つたのではあるまいと思つた。彼は神龕の前を離れ部屋の中央まで歩いて彼等を迎へようとした。伯爵がこの「十字架にかゝつたスフィンクス」の間で客に接するといふ事は滅多にない事である、即ちその事が客人に拂ふ最大敬意である。

伯爵は嚴かな聲で青年に命令した。

「こちらへお連れ申せ、失禮のないやうに注意せよ、いいか……」

青年は以前のやうに體を踞め、蹻音のしないやうに歩いてスフィンクスの間を退いた。

タビッド伯は部屋の中央に置いてある大きな机の側に座を占めた。机の上には銀と金とでつくつた蠟燭臺が四箇その四隅に載せてあつた、そしてそれ等の莊嚴無比の蠟燭臺は四方へ枝を出してゐて、

一臺で二十五六の蠟燭が輝くことが出来たのである。それ等の蠟燭臺と共にかなり大きな金製の箱があつた。伯爵はその中に何を入れてゐたであらうか……彼はその蓋を開けて、古い枯れた葉を取り出して鼻の下へ持つて行つた。それは古い古いミチゲン皇后陛下が伯爵の先祖へ給はつたといふ薔薇の葉であつて、今幾千年の歲月を経てゐるがその香氣を失はないといふ不思議な香氣の葉である。彼がこの枯れた薔薇の葉を取り出して嗅いだ時、奇妙不可思議な香氣が部屋のうちに満ちるやうに思はれた。そしてこの香氣もリタニ宮殿の萬歳を唱へてゐるやうであつた。タビッド伯は不二子嬢等が特別の用事で来たのではあるまいと思つたが、それでも多少心配を感じない譯にはゆかなかつた。それで彼は獨語した。

「何の用だらう。急用があつての訪問らしくも思はれるが……」

すると福原夫人、不二子嬢、駒子嬢といふ順序で續いてスフィンクスの間へ入つて来た。後藤辯護士は一番最後を承つて最も落着き拂つた様子に見えた。タビッド伯は彼等を見るなり直に椅子を離れた。彼はにこにこ微笑しながら彼等を迎へた。彼は密のやうな花のやうな甘い言葉で彼等に挨拶した。彼がかういふ調子で客をスフィンクスの間へ迎へたことはリタニ家の歴史に未だ嘗てなかつた所であつた。

福原夫人は常識論者である、例令彼女が嚴格な意味で常識論者でないとしても、彼女は夢の否定者である。彼は事實の缺乏に對しいつも大痛棒を振りかざしてゐる。彼女はいつてゐる。「私は味噌汁

と馬鈴薯の平凡主義者で御座います、お茶も番茶でいいしお香のものも好みがない。」そして後藤辯護士も無難の中道ばかり歩いて、素人水泳者のやうに事實事實の浮袋に嚙り付いてゐる。この兩人位このスフ・キングスの間に相應しくない存在はないであらう……いふまでもなくスフ・キングスの間は靜寂な夢と古風の詩とが綿で作つたやうな上草履を穿いて歩く所である。福原夫人と後藤辯護士には一面形式を無茶に苦にする所があつて、不二子嬢と駒子嬢とが普通の洋服で伯爵を訪問すると主張した時、「それは儀式に適はない。」といつて反對した。兩嬢は彼等の反對に關らず自説を押し通したけれども、福原夫人と後藤辯護士とはカラ山宮殿の滞在者らしい服装をして伯爵を訪問したのである。福原夫人は黒錦繡の着物を纏つてゐる……この着物の歴史は少くとも中世紀以前に溯らなければならなかつた。この服の首や手の廻りは勿論、裾の縁などに耶蘇紀元前に生存したらしい動物の毛皮が付いてゐる。そして彼女はどいふ帽子を被つてゐたかといふに、大黒頭巾のやうなもので鸚鵡が飾りについてゐる。鸚鵡といふ鳥も極めて常識論者らしい鳥で、福原夫人に替つて神祕を否定しやうに見えた。夫人は女王殿下の伯母さんらしく、寶石の腕環や金銀の垂飾をごてごて體にくつ付けてゐた。かういふ装束を想像すると誰も西洋に相應しくない暑苦しいであらうと思ふであらうが、事實はさうでなく、福原夫人は極めて涼しさうに見えた。それから後藤辯護士の方は青色天鷲絨の正服を纏つてゐた。そして彼はその上に軽い外套を着て、頭に禮帽をかぶり手に銀飾りのあるステッキを持つてゐた。

不二子駒子兩嬢はどうかといふに平常の外出服で來てゐる。これは恰も氣まぐれた空想の幻の世界で小さい聲で現實的近代性を歌つてゐるといつた恰好である。不二子嬢は白羅紗の上着に軽い薄紅色の自動車用上つ張りを纏つて、簡單な大黒頭巾といふ扮装であつた。駒子嬢の方は綠色の着物に精製してない野羊皮の手袋をはめてゐた。不二子嬢も駒子嬢もいづれも屋外遊戯者の穿くやうな頑丈な先きが圓く踵の低い靴をつけてゐた。

「閣下。」と福原夫人は伯爵タビットを見るやいきなり叫んだ。「あなたはあの隣れな青年をどうなさいました……」

夫人は不二子嬢を顧みて叫んだ。

「お前からお話しよ」福原夫人は伯爵に面して置かれた古代式椅子の上にながしりと腰を下した。

不二子嬢は非常に青白い顔をしてゐた、如何となれば昨晚中、殆どとろりとも眠らなかつたのである。大河内が突然見えなくなつたことは晚餐に出席しなかつたので明瞭であつた。その上朝になつてマラ老人も居らないことが發見されたので、憂苦の念がますます強められた。もとより不二子嬢は宮殿の地下室墳墓の間で何か起つたかを全然知らなかつたものであるから、彼女は飛行機で今朝リタニ宮殿へと乗り込んで來た譯である。伯母さん福原夫人の飛行機に對する態度はカラ山入りをした最初の經驗の時と何等進歩した所がなかつたが、仕方がないと彼女は諦めてゐた。不二子嬢は彼女にいつた。「かういふ第四次元國へ來て飛行機を恐れてゐては仕方がないわよ、伯母さんもつと近代的にな

「なくては駄目よ。」福原夫人は不二子嬢に答へた、「近代婦人になるには少々肥り過ぎてゐるかね、せいぜい勉強するとしようよ、それに今朝は私は堂々たる正服で訪問するのだから餘り機關をがたがた亂暴に取扱はないやうに運轉士に命じてお呉れな……私の正服の着付けが毀れては困るからね。」後に残つた那須次郎は疑念と恐怖とで立つてもゐても居れなかつたのである。然しジャポは大河内が山を離れたのでないことを信じてゐた。不二子嬢は今伯爵タビッド面前に立つて彼の様子から彼は全然大河内の失踪には無關係であることを直感した。伯爵は實際に大河内と那須とがリタニ宮殿から見えなくなつたことの報告に接してはゐたが、それを大事件とも何とも考へてゐなかつたのである。彼は彼等がカラ山へ登つたといふことを聞いて驚いたのである。彼は心の中で思つた。「三千年以上の古葡萄酒の瓶位を興へるといふ姑息な手段ではいけなかつた、もつと徹底的な直接行動を取る必要があつたかも知れない。」

不二子嬢は伯爵に大河内が姿を隠したことを物語つて、聲を強めて結論した。

「大河内さんがこゝへおいで下さつたのは、私のお父さんの行方を探して下さるためです。若し何かあのお方に起りでもすると、私とその責任を持たねばならないことになります。」

伯爵は目を閉ぢて一二分間考へた、そして彼は誰に答へるともなく獨語した。

「大河内君が見えなくなつた……それは却つて好都合だ、若し居られるともつとお氣の毒な目に遇はねばならないところです。」

「もつと酷い目に？」と福原夫人は叫んだ。

「しばらくの間スフィンクスの間は静かで、誰もその沈黙を破るものがなかつた。福原夫人は驚く程大きな聲で獨語した。

「もつと酷い目！もうこの位で澤山です。私はこゝへ着いてから酷い目に遇ひ通して居ります……この上もつと酷い目に遇はされては堪りません。」

「あなたを酷い目にお遇はせするといふのでないのですよ。」と伯爵は静かにいつた。

後藤辯護士は福原夫人の着物をひつ張つていつた。

「福原さん、何も経験なのですから、何も経験なのですから……」

「経験はいけんといつたつても人生が樂にならなくちやつまりませんよ。」

福原夫人は不平であつた。

伯爵タビッドは「如何にもお氣の毒ですが、」と前置をいつて言葉を續けた。

「ヤクキ島は獨立國で御座います。この點に皆様も御異存はありません。獨立國として古來から傳統的な特殊の國法がありまして、それに私共は絶對的に服従しなければなりません。この點も皆様の御了解を得る所であらうと信じます。大河内那須の兩君が日本人として照人王の搜索に御盡力下されるといふことは一應御尤でありますが、それが不幸にも國法を破壊することになつたのであります。國法にヤクキは如何なる場合にも他國人の助力を受くべからずと規定してあります。この國法を

侵すといふことが重大問題となるのでして、他國人の救助を受けたものもまた救助を強ひたものも同罪たるべしとも定めてあります。然し王室だけはこの規定から除外されてゐますから、不二子嬢には罪がないことになりましたが、大河内那須の兩君は刑罰を免れることが出来ません。」

「刑罰といひますと」と不二子嬢は體をのり出して伯爵に尋ねた。

伯爵は彼女を見上げ成熟し切つたといへる柔軟な聲で彼女に答へた。

「お驚きなすつては困りますが……若し大河内君の居所が分つた場合ですな、その時は那須君も一緒に運轉士附けずに飛行機にのせ空中へ放つことになります。勿論その飛行機には舵などは附いてゐません。この重大刑罰についてはいつぞや深川の新網町でお話したやうに記憶して居ります。」

不二子嬢初め皆の人々は大きな歎息を洩すのであつた。

伯爵はなほも言葉を續けた。

「大變な問題になつたことを遺憾に思ひます。大河内那須も同國人を助けたいといふおつもりでなされた行爲であることは承知して居りますが、國法を破壊することが出来ません。大河内君等は同じ日本人だと考へられませうが、私共から見ると照人王は日本人でなくヤクキの國王陛下なのです。」

福原夫人は椅子をタビットへすり寄せた。そして彼女は怒聲一番といつたやうな様子で叫んだ。

「そんな残酷な刑罰はありやしない……それでヤクキは千年も進んだ文明國ですつて、驚きましたね……まるで數千年前の野蠻國同様ぢやありませんか。」

後藤辯護士も口を出した。

「千人も學者を一度に穴へ入れて殺したといふ昔の支那にも聞いたことのない刑罰だ。實際ネロ大王でも考へつかなかつた残酷な國法だ。」

然し辯士はすぐ自分の法律意識にかへつて福原夫人にかう言はざるを得なかつた。

「福原さん、如何なる國にも國法の破壊者を根絶する法律は定められて居ります、さもないと國の安全を維持することが出来ませんからね……私共がヤクキにゐる以上、その國法に従はねばなりません。随分残酷な法則とは思はれますが、地を變へてヤクキ島人から見るとそれが至當の法律かも知れません。」

不二子嬢は毅然として伯爵の前に立つた。彼女の眼は伯爵の眼と立會つた。彼女は彼に尋ねた。

「それであなたはこの刑罰を大河内那須のお二人に與へようとしなさるのですか。リタニ宮殿の御主人司法大臣としてあなたは大河内那須の御兩人にこの判決を與へなさるおつもりですか？」

伯爵は靜かに不二子嬢に答へた。

「私は國家へ奉仕する一奴隷に過ぎません。私は國法を如何ともすることが出来ません……それから國の傳統的習慣としまして、戴冠式の場合に重大罪人を悉く飛行機に乗せて空中へ放つてしまふことになつて居ります。」

「戴冠式ですつて？」と不二子嬢は叫んだ。

そして次の瞬間に彼女は決然とした大きな聲で宣言した。

「閣下、私はあなたと結婚を致しません。」

伯爵は不二子嬢の言葉を聞いてその意味に驚いたよりは、寧ろ彼女が彼に断然と挑戦してかかった態度がいふに言へない魅力があると感じざるを得なかつた。彼は椅子を離れて静かに彼女の側に歩いた。彼の白い着物は浮彫になつて呪文式模様は日光を受けて不思議な陰影をつくつた。駒子嬢と後藤辯護士とは、福原夫人とひと塊になつて何か耳語し合つてゐたが、今驚くべき伯爵の告白を聞くに至つた。

伯爵は叫んだ。

「不二子さん！」

不二子嬢は彼を見上げた。彼女には伯爵に對する恐怖の何物も見出すことが出来なかつたが、彼女は確に驚愕を感じてゐた。

「私に取つて日本は天の太陽よりも遙に遠方の異國であるといふ感がありました。」とタビット伯は語りだした。「お國へ渡航いたしましたあなたにお目に掛りました。其瞬間は私に取つて最も重大意義のある瞬間でありました。私は告白いたします……私はあなたを戀したのであります。私は自分の生命を大切にしそれを尊重いたしますが、それ以上に私はあなたを禮讃いたしました。私はあなたをこの島へお連れ申しましたが、あなたを私の妻にしたいばかりで有りました。私はあなたに如何なる

ものも犠牲にし如何なるものも提供いたします。あなたは私を御理解なさいますか。」

不二子嬢は無言に震へたが、いつの間にかやたらタビット伯がまるで彼女に無關係の人間であつて、彼が何か語つて耳の側をすつと通りすぎてしまふやうに感じた。

伯爵は言葉を續けた。

「あなたは私の意味を御了解になりませんか。私の言葉があなたには無意味なものに過ぎませんか。生命のなかには生命がある、また生命の外には生命を超越する所の生命があります、私はすべて生命の祕密を掌の中に擱んで居ります。あなたはヤクオで多くの驚異を御覽になつたが、それは單に知識のいろはに過ぎません。生命と死の神祕なる事もまた生命が死そのものたる事の神祕も私の把持してある所であります。美に夢に靈感に隠れたものの多くがあります、それも私の所有物であつて聽てはあなたの所有物たるに至ります……私はあなたに凡てのものを提供いたします。世界の人は完全飽滿な生命を夢みてしかもそれを得ることが出来ませんが、私はあなたにこれを約束して容易に得させ申します。私はあなたを戀し愛します。神様が戀し愛し給ふやうにあなたを戀し愛します、神様が生き給ふであらう戀し給ふであらうやうに私のあなたに捧げる愛は永劫に變化しないことを私はあなたに誓約いたします。世界の知識は多いでありませうが、それが悉く私とあなたに對しその全部を示顯するに至りませう。私共は世界が圓熟して、時の終結に近いたといふ最も愉快な瞬間を味つてその瞬間を永續させるであります。どうか私を信じて下さい、私を愛して下さい、そして永久に私

の側にゐて下さい、私はあなたに有らゆる驚異をお分けいたしたい。私は生命知識神秘すべてのもの以上あなたを戀しあなたを愛します。どうか私にさうすることの出来る権利を與へて下さい、そして私を戀して下さい。」

不二子嬢は伯爵の言葉を理解した、また彼が信實を語つたものと思つた。彼女は生命の秘密に憧憬れそれを現實的に眺めた。彼女は平凡普通な生命の半面を價值なしとした。彼女はいつかどこでかある人に出會ひ、その人がすべての神秘を解して彼女に語り、彼女はその人と共にその法悦に酔ふであらうと思つて来た。彼女は伯爵タビットが本當を打開けることに疑を狭んだのではない。世界いづこへ行つても愛人はお互に無限永劫の歡喜を語り合ふものである、そしてそれを信するものである。不二子嬢は簡單に答へた。

「私はあなたの仰つたことがよく分つて居ります。またあなたが私にお與へ下さるものの價值も十分に了解いたしました。然しあなたの仰つたものは私共人間が一般にはつ切りと理解し得る所のもので決して私共に隠くされたものではありません。閣下、私はもつとあるものが有るやうに思ひますが……」

不二子嬢はかういつて言葉を止めた、といふのは王城の胸墻の側に立つて美はしい月光に浴みしながら、大河内と語つた場面の光景が彼女の心のなかに浮びでたからである。

彼女は繰り返してかへした。

「もつとあるものが有るやうに存じます。二人がお互に愛し合ふといふ場合に、あなたの仰つたものを所有し得ることの外にもつとあるものがあるやうに存じます。」

伯爵は無言で彼女を眺めた。この時スフ・キングスの窓からさし込む太陽の光線が、不二子嬢の見事な髪の毛の上に落ち、その捕捉することの出来ないやうな美の暗示が彼女の語つた所の「もつと他にある所のもの」を表情で證明してゐるやうに思はれた。

不二子嬢は斷然たる言葉でいつた。

「閣下、私はあなたを愛することが出来ません。あなたは知識の價值をお語りになりましたが、若しあなたが罪のないお兩人を最大刑罰に處しなされるならば、あなたの知識は無益であるといふよりは更に一層危険なものと言はねばなりません。」

かう彼女はいつて伯爵の顔を眺め、彼の心持を探るやうに見えた。彼女は言葉を續けた。

「ヤクキ島王の娘といふ權利を使用して御兩人をお助けする方法はないでせうか。私は全島民にその意見を徴してはどうかと思ひますが、如何でせう。」

「島民にお訴へなすつては致方がありません、如何となれば彼等は國法と一つになつて居りますからです。然しあなたをお助けする方法が全然無いといふ譯でもありません。若し大河内が歸られるならば……勿論歸つて來られるに相違ありません、私は同君と那須君とを乗り込ませる飛行機にそつと運轉士を乗り込ませる、そして海上の遊船へ下りさせませう……然しこれも一つの條件を御承知下さら

ない場合は實行不可能になります。」

「その條件と仰るのとは？」と不二子嬢は叫んで伯爵に返答を迫つた。

伯爵タビットは宮殿の外庭に面する窓の方へ歩いた。宮殿外の青い芝生には千人もヤクキ島人が最早や推し寄せてゐて、宮殿の戸が開くのを待つてゐる。それ等の人々は大玄關前の竝木大路を一面に埋めて、更にもつとの人々が後から續いてゐる。そして宮殿の建物の上には勿論のこと、メッドを飾る圓屋根や高い圓柱にも色彩の美しい長い旗や小さい槍旗が無數に流れて、青空の下で將に行はれんとする戴冠式を祝賀してゐるやうである。

伯爵は不二子嬢の顔を眺めてにつこりと微笑した。彼に取り世界は凹彫りの寶石となり中に「今日只今」が構圖となつてゐるやうに彼は思つたのである。

彼は簡單に不二子嬢にいつた。

「人民は今日正午の儀式を祝ふために集つて居ります。あなたは私の立場を御了解しては下さらないですか？」

第十九章 帝王の間

リタニ宮殿外の群衆は自制心を失ひさうであつた、如何とあればその數が餘りに多かつたと同時に人々が疑問と不安とに満ちてゐたからである。疑問とは伯爵タビットが外國人の若い婦人を妻として

果して幸福たり得るだらうかといふ問題から、廣く異つた血を混ぜることの可否に關してある。そして不安とはヤクキ島の主腦者がかかる開國策を取るといふことが將來に於ける一般島民の幸福になるだらうか否やといふことである。特に群衆中の若い男女は前記の疑問に箇人的とさへいふことの出來る興味を感じた。「外國人と結婚する位の好奇心がないと青年の價値が疑はれて來る。變化は神様の異名だ。私共はそれを禮讚しその前に膝まづいて流動的生命の發達を計らねばならない。外國人の妻を娶るといふ事が人間が變化の神様に與へる默從の最大證據である。神様はお喜びになつて私共に新しい生活力を與へ給ふであらう、過去の束縛を離れて自由の精神境地に生れさせ給ふであらう。」

「君の議論は餘りに理窟に即し過ぎる。第一に明かにしなければならぬことは異種族間の結婚に眞實の愛があるかといふことだ。簡單にいふと伯爵は女王殿下を愛し女王殿下は眞實の愛を捧げ給ふことが出来るかどうかといふことである。君は今好奇心といふ言葉を吐いたが、それは肉體的の意味か、精神的の意味か。「僕は肉體的にもまた精神的にも意味した。然し僕は好奇心が瞬間的性質のものであることを知つてゐる。若しそれが愛の洗禮を受けたい以上永遠性に浴することの出来ないことも知つてゐる。」詰りそこが重大な要點なのだ……伯爵と女王殿下との結婚は眞實な愛から來たものかどうかを明かにしたい。」然し愛を以て始まる結婚でも不幸に終る例は澤山ある。また結婚して後愛に入る例も多い。要するに結婚は、同種族間の結婚にしても一種の冒險だ。況んや異種族間の結婚に於ておやだが、その冒險心こそ青年の生命だ。僕は伯爵が外國人を娶られることを是認する。伯爵の冒險

的態度は進歩的だ。若し伯爵の結婚が不幸に終つても、それから得た経験そのものが事件の損失を償ふに餘りあるだらう。「こんな會話が群衆中の青年間に行はれてゐると、老人達は彼等にいつた。「それだから不安だといつてゐるのだ。伯爵の不幸はたゞ伯爵だけの問題でない。私共ヤクキ島全民の問題なのだ。故に私共は伯爵に自重せられんことを希望して止まないのだ。伯爵は今回の結婚に餘り冒險心を出し過ぎたのぢやあるまいか。」さうださうだ、伯爵は外國人を買ひかぶり過ぎてゐる、野蠻人は野蠻人に過ぎないからね。」然らば年の若い婦人達はどういふ態度であつたかといふに、彼等はリタニ宮殿に漲る結婚式の賑やかな雰圍氣に吸ひこまれてしまつて、不二子女王殿下を羨望するのみで問題として可否を辨別するだけの餘裕を持たなかつたのである。ヤクキ人でも婦人は物質的興味がいさゝか濃厚であつたといへる。

宮殿の方では定刻前に門を開けざるを得なかつた……伯爵タビットは群衆の心急つた騷擾と熱い太陽に直射されてゐる苦痛を思ひやらざるを得なかつた。宮殿の大玄關が正式に開かれた時、彼等は歡喜の聲を叫んでこのうちに入つた、そして彼等は推すな推すなで「帝王の間」へと進んだ。瞬間のうちに帝王の間で彼等に許されるだけの場席は一杯になつてしまつた。それで残りの群衆は帝王の間の外庭に陣を取り、脊の高いものは脊延びして室内を覗き込んだ。小さい兒童などは大人と大人との間にはさまつて泣くのも澤山あつた。

彼等はしばらく立つと軽い明るい音樂の響いて來るのを聞いた。其時彼等は間もなく御儀式が開始

されるのを知つたのである。帝王の間は寂として聾なく息を殺してその始まるのを待ち設けてゐるのであつた。玉座の後部にある階段の上層部は開いた。朗かに響き渡る音樂につれてその開いた戸の彼方から不二子女王殿下が侍女達を引きつれて靜かに階段を下つた。

女王殿下が最初にたゞ獨り玉座から島民に挨拶されて將來の誠愛を誓約されるといふことは、ヤクキ島數千年來の古式に則つたのである。今女王殿下の服装は如何と見ると、彼女はミチゲン皇后陛下が戴冠式に使用されたといふ正服を纏つて居られた、即ち一枚に織つた水泡のやうに清らかな白い着物で、それが光線の加減で五色の虹を放散するのであつた。頭に戴かれた王冠には寶石の小さい瓔珞が無數に垂れて、首の廻りの首飾は代々の皇后陛下の御首に觸れたものである。彼女の腰を取り巻いた紅玉の帯は幾千年の歲月を費やして蒸溜したといふことの出来る色彩に輝いた。女王殿下の有様を一言で譬へると、彼女はその紅玉そのもの、やうであつた、表形美術の最高標準ともいふことの出来る生命と描線の美とを完全に備へてゐたのである。

今ヤクキ島最高會議の委員達は帝王の間に入つて來たのである。彼等は思ひ思ひに白や黒や乃至は色もの、服装であつたが、いづれも胸に大きな金製の星を飾つてゐた。そして近衛の騎兵隊が百人近くも玉座の後の階段に並んで玉座を守護したが、その有様は恰も毛茸の黄金土手を築いたが如くであつた。不二子女王の侍女達の先頭は駒子嬢が承つた。玉座近くに福原夫人と後藤辯護士の二人が陣立つてゐた。そして福原夫人は後藤に耳語したのである。

「かういふ物凄(ものすげ)い御儀式(ごぎしき)に出ると気が遠(とほ)くなつて、不二子(ふじこ)が實際(じつじ)に來るか來ないかわからなくなつて
あました。戴冠式(たいくわんしき)の結果(けつこ)がどうなるか知らないが、兎(う)に角(かく)無事(むじ)にその式(しき)が濟(す)んでもらひたいと思(おも)ひま
すよ。」

「私も結婚(けっこん)の結果(けつこ)を考(かんが)へるとまるで何もかも分(わか)らなくなつてしまひますよ……相手(あいて)が外國人(がいこくじん)ですから
ね、外國人(がいこくじん)も外國人(がいこくじん)、第四次元(だいじげん)などといつてゐる外國人(がいこくじん)ですからね、その上(うへ)伯爵(はくしやく)と來ると到底(たいてい)私共(わがら)平
凡漢(はん)の敵(てき)でない純正(じゆんせい)哲學派(ていがくは)の達人(たつじん)ですからね、少々(せうせう)手硬(ていじやう)いですよ……」

かう福原夫人(ふくはらふじん)と後藤辯護士(ごとうべんごし)がこそ話を(はな)してゐる間に不二子嬢(ふじこぢやう)は玉座(たまざ)についた。お附(つ)きの侍女(じやうにょ)達は
玉座(たまざ)を取り圍(かこ)んで坐(ま)つた。福原夫人(ふくはらふじん)はその有様(ありさま)を眺(なが)めて、「あゝ綺麗(きれい)ですね、まるで夕日(ゆづ)に光(ひ)つた雲
の卷輪(まきわ)のやうだ。」と獨語(ごご)して、自分(じぶん)ながら名句(めいこ)を吐(は)いたと思(おも)つて微笑(びせう)を洩(もら)した。不二子嬢(ふじこぢやう)は體(てい)こそ
小さ(ち)かつたがその品位(ひんゐ)のある美貌(びやう)は全く批評(ひひ)以上(いじやう)であつた。伯爵(はくしやく)タビットや總理大臣(そうりだいじん)其他(その他)高官(こうかん)連(れん)が席
についた、不二子嬢(ふじこぢやう)は眼(め)をあげてそれを眺(なが)めようとしなかつた。伯爵(はくしやく)はそのことを多少(たせう)不平(ふへい)に思(おも)つた
らしくも見(み)えた。如何(いか)となれば彼(かれ)に對(たい)し世界(せかい)は凹彫(くぼみ)りの寶石(ほうし)のやうに「今日(こんにち)只今(ただいま)」の構圖(こうず)が輝(かが)いてゐ
たから、不二子嬢(ふじこぢやう)たるものもその美(び)を共に味(あじ)つて然(しか)るべきだと思(おも)つたからである。

戴冠式(たいくわんしき)の順序(じゆんじゆ)はいふまでもなく結婚(けっこん)の誓約(せいやく)を一生(いっしやう)を通じて違背(ちゐはい)しないこと(こと)で始(は)まつて、書記官長(しよきくわんぢやう)の
ヤクキ島王家(たけがしきま)の歴史(れきし)朗讀(らうどく)がその次(つぎ)であつた。この朗讀(らうどく)が終(は)るとリタニ宮殿(みやうでん)の主事(しゆじ)らしい男(おとこ)が大きな聲(こゑ)
で叫(こゑ)んだ。「今天(こんにち)に一つ(ひとつ)の雲(う)もなくその青天井(あかてんぢやう)を亂(みだ)しません、地(ち)には本日(ほんじつ)の御儀式(ごぎしき)を祝(いわ)ふ聲(こゑ)で溢(あふ)れ

てゐます。このやうな目出(めで)たい戴冠式(たいくわんしき)は世界(せかい)初(は)まつて以來(いらい)未(いま)だ會(あ)つて無(な)かつた所(ところ)で御座(ござ)います。一(いち)總理
大臣(だいじん)と書記官長(しよきくわんぢやう)はいつの間(ま)にか席(せき)を退(ひ)いてゐたが、今(いま)彼等(かれら)は大きな銀製(ぎんせい)の臺(だい)に皇后(こうご)様の(やう)王冠(わうくわん)を載(の)せ、
それを重(おも)さうに兩手(りやうて)で持(も)つて出(で)て來(き)た。王冠(わうくわん)そのものは左程(さほど)の重量(ぢやうりやう)はなかつたに相違(さかた)ないが、銀(ぎん)の臺
がかなり重(おも)かつたのである。總理大臣(そうりだいじん)は島民(たうみん)の方(ほう)に向(むか)つて王冠(わうくわん)の由來(ゆらい)を語(かた)つた。「そもそも此(この)王冠(わうくわん)は
私共(わがら)が神様(かみさま)のやうに崇拜(すうはい)するアリバル王(わう)が、島内(たうない)の有(あ)らゆる寶石(ほうし)の粹(すい)を集(あつ)めてお作(つく)りになつたもの
で、天日(あまひ)と共に永劫(えいけつ)なるべしと仰(おほ)せられたものである。これを戴(た)くものは生命(せいめい)の長(なが)さを天地(てんち)と争(あ)ひ其
幸福(きふく)を星(ほし)の光(ひかり)の如(ごと)くに輝(かが)かすめる事(こと)が出来る。不二子嬢(ふじこぢやう)は玉座(たまざ)の前に起立(きりつ)して總理大臣(そうりだいじん)の言葉(ことば)を聞
いてゐたが、それが何(なん)の意味(いみ)だかを了解(れいかい)しようとしてもしなかつたやうである。彼女(かのぢやう)は駒子嬢(こまぢやう)を顧(かへ)みて顔
から薄薔薇色(うすばらいろ)のヴェールをあげて呉(く)れと合圖(あひづ)をした。駒子嬢(こまぢやう)は彼女の命令(めいれい)に従(したが)つてヴェールを取り去(さ)り
つた。不二子嬢(ふじこぢやう)いな女王(じやうわ)殿下(てんか)は恭(うや)しく膝(ひざ)まづいて總理大臣(そうりだいじん)の手(て)で頭(あたま)に王冠(わうくわん)を載(の)せて貰(もら)つた。特にこ
の間の美(び)は譬(たと)へるにもなしといつていゝ位の繪畫(えいゑ)であつた。伯爵(はくしやく)タビットは「あゝ美しい」と心
のなかで叫(こゑ)ばざるを得(え)なかつた。福原夫人(ふくはらふじん)もいよいよ自分の姪(めい)がヤクキの皇后(こうご)陛下(へいか)になるのだと明瞭(めいりやう)
に意識(いしき)するやうに感(かん)じた。玉座(たまざ)の周圍(しうゐ)に竝(なら)んでゐる侍女(じやうにょ)達は勿論(もちろん)のこと、最高等(さいこうとう)委員會(委員會)の人々(ひと)や近衛
の騎兵隊(きへいたい)の連中(れんぢゆう)も、かういふ非現實(ひげんじつ)的な場面(ばめん)は二度(にど)と見(み)ることが出来(こ)ないであらうと思(おも)つて一齊(いっせい)に長
い禮讚(らいざん)の溜息(ためいき)をついた。

この時(とき)これ等(これら)の人々(ひと)や室内(しつない)の島民(たうみん)達は不思議(ふしぎ)な人間(にんげん)が一人(ひとり)玉座(たまざ)の側(そば)に突(とつ)然(ぜん)立(た)つてゐるのに注意(ちうい)し

た。彼は比較的瘦せた男であつたが、その血色のいゝことは、曙の日光に譬へることが出来た……曙の空には多くの豫想が暗示され將來の暗示が漲つてゐるが、そのやうにこの男の容貌は豫想と暗示とに満ちてゐた。人々は彼を眺めて叫んだ。

「誰だ……あの男は無断で入つて来た、しかも玉座近くに立つてゐる。彼は誰だ。」

「この男は低い聲で獨語するやうに叫んだ。」

「いゝ、いゝ、完全だ、見事だ。」

不二子女王は彼の方へ振り向いた。彼女はびつくりして一言も發することが出来なかつた。然し彼女は手をさし延ばしてつかつかと彼の側へ行つた。彼は紫水晶をちりばめた長い緑色の着物を纏つてゐたが、彼女の手を懐しやうに握つた。

帝王の間に溢れた人々は叫んだ。

「何事が起つたか……」

件の男は不二子嬢の手を握りながら彼女の顔をしみじみと眺めて、そしていつた。

「不二子、不二子、お前の女王振りは見上げたものだ。こんな神々しい光景をお父さんがどうして見ずにゐられよう……お前が達者で、お父さんはどんなに嬉しいか知れない。不二子、よくまあこゝへ来て來れたね。」

不二子嬢は叫んだ。

「お父さん、お久しぶりで、私の喜びをお察し下さい。」

彼女は氣がおどおどして聲を出さんばかりに嬉し涙を流した。彼女の熱い涙は頬に落ちた。式場に居並んだ百官有司から參列の島民に至るまで驚愕の眼を見開いて彼等兩人を眺め、恰も夢から覺めて現實に觸れたもの、やうに、その神経はびくりと緊張した。彼等は大きな聲を出して叫ばなかつたが、いづれも心のなかでは叫聲を發した。

「陛下らしい……照人王陛下だ、陛下だ。」

照人王は直に妹の福原夫人と後藤辯護士を認めた、そして彼はびつくりして眼をばちくりしてゐた福原夫人にいつた。

「お前もこゝにゐるのか、お前も壯健で嬉しい。」

それから後藤辯護士の方を向いていつた。

「後藤君、君にはしばらく目だが、不思議な所でお目にかゝるね……兎に角君の壯健を喜ぶよ。」

照人王は不二子嬢に何か耳語した。不二子嬢は驚いたやうな顔を彼にあげたが、直ぐ顔を他へ反らした。王様は彼女に何を囁いたのであらうか。彼女は躊躇してゐるといふやうな有様であつた。彼女は額から額に至るまでさつと赤味を帯びた。王様は彼女に耳語されて何か強ひられたやうであつた。彼女は彼の命令に従つて承知したといふ表情をした。すると王様は式場の右の後に垂れてゐる金欄の幕をあげてそのなかへ入られた。不二子嬢も一言の挨拶もなくするりと式場から王様の後を追つて、

二本の大きな圓柱の間に垂れてゐる金欄の幕をあげた。彼の姿は消えた。彼女は王様の命令に従ひ帝王の間に續いてゐる「帝王の四阿」へと急いだのである。

不二子嬢の心は驚異と疑惑とに満ちた。彼女は父の言葉の意味をはつきりと了解するだけの餘裕を與へられなかつたので、たゞ無意識に動いたに止まつた。式場を出て圓柱の彼方へ足を踏みだすと彼女を高く蔽つた空には青々として一片の雲さへ無かつた。彼女は頭をあげて彼女の戴冠式を祝賀する長旗が柔かな微風に揺れて建物の頂上を飾つてゐるのを見た。葉の先が尖つた熱帯植物の葉蘭が樹木のやうに生長して建物の蛇腹にまで達してゐる、五色の色彩で塗つた羽を持つ名の知れない不思議な鳥が小唄を唄ひながら不二子嬢に流眊を送るやうであつた。彼女は着物の裾を上へ撮みあげ、ヴェールを手に握つたまゝ、小歩に股いだ。彼女の黄金の草履は静かな蹺音を響かせた。彼女の王冠の小さい瓔珞はちりちりと音を放つた。彼女の今歩いてゐる小道のどんづまりに帝王の四阿があつて、その戸口に帳が垂れてゐた。この四阿へは王様の外入ることが許されなかつたのである。

四阿は池に面して立つてゐた……池には虹のやうな五色の色で染めてある蓮の花が今を盛りと咲き誇つてゐる。池には綺麗な水がなみなみと溢れて、この上を足の素敵に長い蟲が鳴きながら歩いてゐる。不二子嬢はこれは池といふよりは寧ろ鏡といつた方が本當だと思つた。池の水が太陽の光線を受けて光ると金銀を混ぜたやうな色に輝き、それが四阿の床へ太陽から受けた光線を反射して、廣い床が鏡のやうに光るのであつた。床はいふまでもなく小さい模様瓦で敷きつめてあつた。かういふ四阿

に入ると誰も現實が幻に入り、幻が緊張して現實化するのを思ふであらう。不二子嬢はこれを見て言葉を失つた、そして自分が夢でも見てゐるのではないかと疑つた。實際に彼女は夢遊病者ではないかとさへ思つた。

彼女は四阿の戸口の帳をあげてその中に入つた。歴代の帝王だけしか入ることの出来ない四阿であつたためか、なかの空氣が重苦しかつた。不二子嬢は邊りを見廻して父があさうなものだと思つた。然しその影はいづこにも見出されなかつた。彼女は男子の賑やかな笑聲を聞いて驚いた。彼女は今まで行方不明とばかり思つてゐた大河内が奥から出て来て彼女を迎へたのである。

「お父さんは？」と不二子嬢は大河内に尋ねた。

大河内は彼女に答へた。

「式場においででせう。直ぐあなたをこゝへ寄越すからと仰つてお出かけになりましたきりお歸りになりませんよ。よくおいで下さいました、どうぞお入り下さい。」

大河内は不二子嬢を四阿の座敷へ案内してその隅にある壁沿ひの長椅子に坐らせた。その長椅子の前に小さい机が置いてあつて上に無花果の實や葡萄酒の瓶などが載つてゐた。不二子嬢は大河内が多少憔悴して顔が蒼白になつたと感じたが、眼は依然として生氣に輝いてゐるのを喜んだ……生氣の輝き以上に狂氣の燃え上りではないかとさへ疑つた。そして彼女は思つた。「どうしてかういふ危険地帯へ平氣でやつて来てしかも帝王の四阿に悠々と納まつてゐるとは不思議な事だ」大河内の方では不

不二嬢を眺めて思つた。「二三週間前には東京で道ですり違つたからとて口を利かない間柄だつたが然るに今はどうだ、一二尺しか離れない場所であつた。その上彼女は普通の女性でない、ヤクキ島の女王殿下なのだ。世界に變化ありと雖もこの位驚くべき變化はまたと有るまい」大河内は微笑しながら手をさし延して彼女の手を取り、彼女の顔をしみじみと眺めた。その様子は恰も遠方の魂を探してゐるやうであつた。然し彼の顔は歡喜を包みきれないことを明瞭に表情してゐた。不二嬢は手を握らるるまゝにそれを振り離さうともしなかつた。彼女は彼に對して柔順であつた。彼女は平然と彼が崇拜にまかせて偶像となりすましてゐた。

彼等は手に手を取つて座敷の廊下から池を眺めた。大河内はいつた。「綺麗な景色でせう。鏡のやうな水面に姿を映してゐる蓮の花はどうです……到底日本などにある蓮の花とは違つて十層倍も立派ぢや有りませんか。水のなかを見てゐると、確にもう一つ廣い世界がこの下に有りさうですね。」

「ほんたうですね、私共の今件である世界の外に、上にも下にも世界があつて、ここが三つの世界へ出たり入つたりすることの出来る神祕の門に相違ありませんね。」

「私もさう思つてゐます。私はかういふ理想的な四阿であなたと二人きりでお話したかつたのです……このことをあなたのお父さんに洩しましたところ、それではさうしてやらうと仰いました。私はあなたが私の希望通りにおいで下すつてどんなに嬉しいか知れません。」

大河内はかう不二嬢に答へて彼女の顔を再びしみじみと眺めた。彼女は顔をあげて彼に尋ねた。「あなたは何處においでになつてゐたのです、これをまづ最初にお話し下さいまし……どんなに私共は心配したか知れやしません。ほんたうに昨晚私は一刻も眠らなかつたのですよ。いろいろと想像したり恐れたりなどしまして、どうしたらいいかと心配ばかりして居りましたの……」

彼女は昨日の夕方から今朝のタビット伯會見に至るまでの苦痛を思ひだして、事件の真相を一刻も早く聞きたかつたのである。大河内は嬉しうな顔をして不二嬢に答へた。

「そんなに御心配下さいましたか。有難う御座います。まつたく御心配させて濟みませんでした。」

「あなたがお父さんを探し出して下すつたのですか。父は何處に居りましたか。父は何をしてゐましたか。どういふ工合であなかが探し當てになりましたのですか？」

彼等は今廊下を離れて前の壁沿の長椅子へ歸つた。長椅子は黒薔薇色の天鵞絨で張つてあつて、坐ると體が埋まつてしまふ程ふつくと柔かであつた。彼等が明るい鏡のやうな池の側から部屋のうちへ入ると、恰も影のなかへ吸ひこまれたやうに感じた。彼等が一緒に天鵞絨の長椅子に腰を下した時、その手は互に握り合つてゐた。大河内は不二嬢の手の温かみを感じて、言葉で語ることの出来ない歡喜がぞくぞくと體に染み渡るやうに覺えた。彼は心のなかで思つた。「かうした瞬間はまたと有るまい、今に消えるであらう、故にこの瞬間が無くならない間完全にそれを味ひたいものだ。」

大河内は彼女に答へた。

「私が王様を探し出したことは何れ詳しくお話しするつもりで御座いますが、今はどうかそれを話せと仰つて下さいませぬ。かうして二人きりかゝる所ですと、話するのは勿體ないやうな気がしてなりません。私は私共がかうしてゐるといふ瞬間に酔つてゐたいのですよ。全く不思議ですわね……ただ不思議といふの外はありません。」

「さうですよ、不思議ですよ、信ずることの出来ない程の驚異ですわね。」

彼女はこの不思議驚異の言葉をどういふ意味で使つたであらうか。大河内は自分の意味とは多少食違つてはゐないだらうかと疑つた。即ち彼女は自分が女王陛下となつて帝王の間に顯はれたことや、ミチゲン皇后陛下の着物を纏つたことなどを不思議である驚異であるといつたのではあるまいかと疑つた。彼はその點に不幸を感じざるを得なかつた。

大河内は彼女にいつた。

「あなたにも不思議に思はれますか、驚異に考へられますか？」

不二子嬢は現に戴冠式の正服で大河内の側に坐つてゐる。彼女は水泡のやうな白い衣裳を着て事實上に寶石のなかに埋まつてゐる。大河内は今彼が味つてゐる瞬間が今にも消えてしまひさうに感ずると、それが最も重大な瞬間であると思つた。すると彼の眼前から四阿の座敷も池も池の蓮花も一時に消えて、自分が岸邊がどこにあるのだからかまるで分明でない大きな海に彷徨つてゐるやうに感じ、そし

本

てその海上で戀といふ小さい舟に乗つてゐると思つた。彼はこの戀の舟が波に採られて自分を不安の心理状態へ引き込んで行くやうに感じた時、彼の手に握つてゐる不二子嬢の手だけが頼りに過ぎないと思つた。この瞬間に大河内はぐつと彼女の手を掴み、それを自分の唇へ持つて行つて綺麗な細い指を接吻した。彼は叫んだ。

「不二子さん、不二子さん……」

そして彼は彼女にいつた。

「かうしてこの島で愚圖ぐづしてゐると何か起つて来るか知れやしません。私はあなたにお話したいことが有ります。」

彼は心を落着けて語りだした……不二子嬢は手を振り離さうとしなかつた、大河内のなすがままに任せて置いた。彼はどう彼が彼女を追跡してヤクキへ来たかの一部始終を物語つた。彼はアロハ丸で到着前夜に於ける心配から上陸してどうメッド入りをしたかを詳しく彼女に話した。そして彼は話つた。「カラ山へ登つてあなたと胸壁に凭りかかりながら月光に浴びたことは嬉しかつたのです。そして私はその晩寝すにあなたの部屋を眺めて愛の祈禱を唱へました。ああ、それから昨日ですが、夢のやうに過ぎました……昨晚私がどうして王様を探し出したかは追つてお話しすることに致しますが、不二子さん、どんなに私があなたを愛してゐるかを観察下さい。」大河内はしばし無言のまま彼女の手を弄つてゐた。彼女はその手を振り離さうとしなかつた。

彼は彼女に囁いた。

「不二子さん、私の愛を受けて下さいませるか……勿論受けて下さるでせう。私は今までそれを語るこ
とが出来ませんでした、然し今は躊躇してゐることが出来ません……若しあなたがタビットの妻とな
つてヤクキの皇后様にお成りになると、私は絶望の淵に投げ入れられてしまひます。不二子さん、お
許し下さい、私はあなたを愛します……私の愛は到底言葉で語り盡されません、ただ愛すと申し上げて
餘はあなたの想像に任せます。」

そして彼は言ひました。

「あなたは危険ですよ、ヤクキ島人はあなたをどうするでせう、あなたがどんなにお成りになるかは
神様だけが御承知でせう……ああ、危険な島だ。」

不二子嬢と大河内とは影のやうに薄暗い場所に坐つてゐたのであるが、不二子嬢の王冠から垂れて
ある黄金の璽珞は燦然と光つた。彼女の肩を蔽つてゐるヴェールは夕日を受けた波のやうに微笑ん
だ。彼女の姿は殆んどこの世の存在とは思はれない程非現実的のものであつた。大河内は彼女が眼を
あげて彼を見上げる瞬間を待つた。彼等の眼と眼とが出會つた。彼は二つの腕をさし延して彼女を引
きよせた……この時彼女はミチゲン皇后の戴冠式正服を纏つた女王殿下でなくてただ一箇の酒井不二
子嬢であつたのである。彼は彼女の小さい頭を両手で抑へて自分の顔の方へ持つて来た、そして彼は
彼女を接吻した。彼女は再び自動車遭難の晩のやうに大河内の膝の上に横たはつたのである。現實は

いつの間にもやら消えて大河内は再び戀の海の上に揺れてゐるやうに感じた……然しこの時は何の心配
もなく靜かに心豊かにその海上に浮んでゐた、彼の上には大きな青い空が擴がつてゐたのである、

彼等はしばしの間無言のまま體を擁し合ひながら天鷲絨の長椅子に横たはつた。彼等は互に澤山の
ものを語り更に澤山のことを聞き合ひたいと思つた。然し彼等はこの喜ばしい瞬間に酔ひ續けたいと
願つた。彼等は眼前の疑惑の中から將來の希望が煌くやうに感じた。彼等は互に手を取り合つて希望
の眼を將來に向けた。この小さい四阿が半透明の雰圍氣で包まれて、愛の觸れる所、愛の眺める所、
愛の呼びかける所、悉く朗かな戀の音律を答へないとさへ感じられた。大河内は不二子嬢にいつた。

「不二子さん、あなたは女王殿下でしたね、それに私はほんの一般民に過ぎない。」

「私は女王かも知れませんが」と不二子嬢は答へた。「私共を困らせるだけのものならば、女王をい
つても廢棄いたしますわ。」

彼女がかういつた時如何にも彼女は愛らしく見えた。
大河内はいつた。

「でもあなたは自分の決心をよくお考へになりましたか。あなたが私を愛して下さることは私の喜
ですが、不二子さん、そのためあなたは二度と歸ることの出来ない神祕の國を見捨てねばならないこ
とを御承知ですか？」

彼女の額や首筋におくれ毛が三四本だらりと落ちた。それがたまらなく艶麗に見えたので大河内は

それを見入つてゐた。若し、彼が畫家であつたならば、この姿勢で一枚不二子嬢の肖像畫を作らねばならないと彼は思った。彼女は大河内の質間に答へなかつたが、それを反對の意味に彼は了解しなかつた。

彼は質間の方向を變へていつた。

「この島の人々はすべての知識を握り秘密を知つてゐるでせう、他の世界の人々が單に語り合ひ希望し夢みてゐるに過ぎない所を既に實行してゐるでせう……確に不思議な國ですが、私と共にここを見捨てることを残念に思ひはしませんか？」

不二子嬢は斷然たる聲で大河内に答へた。

「ヤクキ島の知識が何です、秘密が何です。私はそんなものを何とも思つてゐません。實際に私の秘密は彼等の二倍の價値があると思ひますね。」

「それぢや残念に思ひなさないのですね、決して殘惜しいとは思はないのですね。」

「勿論のことですよ。」と彼女は答へた。

この時大河内は世界がぱつと清明に光つて來たやうに思つた。彼は不二子嬢と共に薄暗い壁沿の長椅子を離れて、無意識に手を取り合つて部屋の中を歩いてゐるのである。不二子嬢は言葉を續けていつた。

「御覽なさい、池の蓮は如何にも見事ですすがそれとてもヤクキだけの花ではありません。私共の日本

にも蓮の花はあります。この空は高く詩の世界を想像させますが、日本の空もそれに負けません。私はヤクキと日本の比較論をするではありませんが、私は女王を止めて單なる不二子になつても残念でないことをあなたに證據立てたいのですよ。」

「よく分りました。」と大河内はいつた。「あなたがここにおいでになれば宮殿のお住居ですが、あなたが日本へお歸りになると、別の異つた宮殿をあなたに差上げなければならぬ……宮殿といつても私共のはアバメントの敷室といふ至極簡單なもので、さぞあなたが御窮窟だらうと思ひます。特にカラ山上の王城の住ひとは比較にならない粗末なもので、今から私は心を苦しめてゐます。」

「あら、そんな御心配は無用にして頂戴ね。」と不二子嬢は叫んだ。「私はアバメントが大好きなのです。私は叔母さんと長い間それに住んで來たのですから少しも不平は有りませんわ。」

「それをお聞きして安心しましたが、今日日本へお歸りになつて狭いアバメントにお入りになつたならば、定めて箱のなかへでも推込められた感じがするでせうね。」

「私は箱のなかの生活が好きなのですよ。」と不二子嬢は小さい朗かな聲で叫んだ。

「ほんとにさうですか？」と大河内は喜んで大きな聲を出した。

「ボタン一つ推せば水が出て電氣が來る、手を延ばすと茶籠筒に届き日中は長椅子になつて夜は寢臺に早變りするといつたやうな簡易生活が私の柄に合ふのですよ。」

「私もその主義なのです。私自身も東京でアバメント生活をしてゐるのですが、私はあなたとお

茶の水で初めてお目にかかった時、私はあなたの生活をいいと思ひました。不二子さん、あなたはこの主義にいつからお成りになりましたか？」

彼女はこれに答へる前に頭を揺つた、そして大河内の手を握つて、それを自分の肩へと持つて行つた。

「お茶の水のアパートメントにゐた時にはその本當の意味を知らなかつたのですよ。だが今はそれが實際の生活だと思つて來ましたのです……複雑で無意味な宮殿生活が私をアパートメント主義者にして呉れました。」

「私はあなたの言葉を聞いてますますあなたの性格がはつ切りして來ました。」と大河内は心のなかから感謝した。

彼等はこんな談話をしてゐると時間が滑つてゆくのを感じなかつた。彼等は瞬間に潛む永劫に生きてゐたのである。すると那須次郎が四阿の外で呼んでゐるのに氣がついた。

「那須ですね、何か急用でもあるのか知らん。」と大河内は獨語した。

那須は叫んだ。

「大河内、早く式場へ出なくちや駄目だよ、酒井さん、いな王様はあいつ等を手厳しくやつ附けられたい。君が出て酒井さんの話されたことに證言しなければならぬ役廻りなのだ。」

大河内は四阿の戸口に垂れてある帳をあげながら叫んだ。「那須、入つて來給へ。彼は首を帳の外

へ出した、そしてそこに駒子嬢が立つてゐるのを見た。彼は彼女に軽い會釋をして「失禮しました、」といつた。駒子嬢は不二子嬢がすつと玉座を抜けて外へ出られた時、その後を追つた、そして南洋特産の葉蘭が一杯茂つてゐる小道の途中で、彼女ははつたり那須に出會つたのである。それで彼女は那須と共に不二子嬢と大河内の番兵を努めてゐた譯であつた。然るに彼等は再び帝王の間へ戻つて酒井さんが大河内の證言を要する場合になつてゐるのを見出したのである。故に彼等はまたもや式場を抜けて來て大河内にそのことを告げたのである。

「それぢや行きませう。」と大河内は不二子嬢を促した。

「何だか怖くて仕方がないですよ。」と彼女は大河内と那須とを等分に眺めていつた。「今朝私共がタビト伯に面會した時、あなた方二人を舵無しの飛行機に乗せて空中に放つ刑罰に處すことになつてあるといふのですもの。伯は何をするか知れやしませんよ。」

「表面ああいふぬるぬるした男が危険なんですが、飛行機に乗せるとは面白いですね。若し乗らぬと頑張つたらどうするだらう。」と大河内はいつた。

那須は微笑しながら答へた。

「その時には落ち首といふ奴だらうよ。」

「然しヤクキでは直接な方法で人を殺さない國法だといつてゐるさうだ。」

「早く式場へ行かないと、どんなに王様が困つて居られるかも知れない。」と那須は大河内と不二子

嬢とを促した。

不二子嬢は帝王の間の小さい側面戸に入る前に不安の心持で躊躇した。大河内は彼女の腕をしつかりと掴んで彼女に囁いた。「心配するには及びません、ただ私を信じて下さい、愛して下さい。どんなことが起つても私を愛すると一言いつて下さい……」彼女を見上げていつた。「どんなことがあつても私の愛は変わりません、あなたも同様に私を信じて下さい。」大河内と不二子嬢は手と手を握り合つて小さい戸を推しなかせ入つた。

照人王陛下は發言中であつたが、その聲は男子らしく嚴然たるものであつた。式場の人々は息を殺して王様の完全な陳述に謹聽してゐるやうに見えた。王様は今まで語つて居られた陳述に最後の言葉を與へられた。

「……このことに就いて私よりもつと直接にその真相を知つてゐる人に語らせませう。」

王様はかういつて今玉座の側に坐つたばかりの大河内洋三に目配せをした。彼はつかつかと歩いて玉座の壇へ上り王様の側に立ち、正面に熱心な群集を眺めた……群集は何事だらうと思つて固唾を飲んで耳を欬てた。大河内は今如何にして彼が陛下を見出したかといふ最も不思議な殆ど信ずることの出来ないやうな談話を陳述するのである。彼は自分の聲が餘りに大きかつたので自分ではあるまいかとさへ疑つた。然し彼はヤクキ島へ着して以來、實際的なことと空想的な事とが一つになつて新知識を作つたので、この不思議な精神状態を自然の状態であると思ふやうになつた。彼には何物の不思議

もないやうに感じた。それで彼は昨夜カラ山上の墳墓の地下室に於ける経験を疑はなかつたのである。また彼はそれを疑はねばならない必要も認めなかつたのである。

「私の物語は狂人マラを以て始まりませう、皆さん御承知のマラです、『王様、王様』といつて鹽のやいな涙を流して街を泣いて歩いた狂人マラの事です。」といつたやうな調子で大河内は話を進めた。彼の陳述振りは簡單であつた、自由であつた。恰も彼が日東新聞社の編輯局で社會部長横井に最近の殺人事件を語つてゐるやうであつた。彼は列席の人々に如何に彼がマラを追跡したかを話した、そして如何にマラがヤクキ島寶の寶石を弄つたかを、如何に彼がアリバル王の墳墓の前のまだ空虚になつてゐる壁龕の前で氣絶したかを話した。大河内の陳述を聞いてゐた群集は驚異の沈黙に落ちた。彼等は無邪氣な驚愕の表情をした。然し彼等は大河内の言葉を疑つたといふやうな點は感じられなかつた。大河内はこの時、丁度野原の花へそよ吹く風の説明をしたやうなものだと思つた。風のことなら花の方がよく知つてゐるといふ花のやうな表情をして、ヤクキ島人は大河内の顔を見上げた。

然し伯爵タビットはどういふ工合に大河内の陳述を受取つたであらうか。彼は最初は平靜な態度で大河内の言葉を聞いてゐたが、段々朱を帯びて来てどす黒くなつて來た。大河内は汚い悪人の顔の色だと思つた。それから不二子嬢も彼の顔の皮膚を見てさう思ふだらうと想像した。然し伯爵は確に怒つたらしいが、それでも彼は柔和であつて優美に近いやうな様子をしてゐた。大河内は心のなかで思つた。「怒つたなら怒つたらよささうなものだ、何も無理にさう上品に構へなくてもよささうなもの

だ、男子らしくない、然しそれが彼の悪漢たる所以かも知れない。」

大河内は伯爵の方を向いて式場の隅すみまでも聞えるやうな鋭い聲で叫んだ。

「ヤクホの人々よ、タビット伯は人間の年齢を支配する知識、即ち人を老若させたりする秘密を掴んで居られる……私は第一この點に伯爵を非難します。伯爵はこの知識を照人王の上に犯罪的に適用しました……」

大河内はかう叫んだ時伯爵がどんな顔色を表はすだらうといふことよりは、どういふ工合に不二子嬢が彼を受取るかに興味を持った。不二子嬢は自分の兩手を握り合せた、驚いてその唇を半ば開けた。疑ひもなく彼女は一種の恐怖を覺えたのである。王様の左側に座席を占めた伯爵タビットは王様に肩を近寄らせた、そして微笑しながら彼に耳語した。

「陛下、日本の新聞は年々悪化してゆくといふことは聞いてありますが、まさかこれ程までとは思つてゐませんでした。もとよりその影響を受けた米國のジャーナリズムに罪があるかも知れないが、日本の編輯方針はいささか軌道を脱してゐます。大河内は新聞記者としての職責を果したであらうが、私の迷惑をお察し下さい。」

大河内は伯爵の言葉を耳にして直に彼に向つて叫んだ。

「何を仰います、聞き捨てになりません。」

伯爵タビットは微笑しながら大河内に答へた。

「君は新聞の三面記事として煥動的な小説を考へだしたのだ。僕は絶對的にセンセーショナルな新聞記事を排斥する。君の語る所は君の捏造だ。最早や疑ふの餘地なしだ。」

照人王は玉座に身をそらしながら伯爵に叫んだ。

「捏造ですつて？」

「さうです、新聞記者の捏造です。」と伯爵は語勢を強めて王様に答へた。

王様は微笑しながら伯爵にいつた。

「若し捏造でなくて本當の事實であつて、それがあなたの頭から出た描想であつたらあなたはどのようなさる。」

「斷じてそんなことは有りません。」と伯爵は言ひ放つた。

不二子嬢は無言であつたが、心のなかで繰り返した。一まさかにね、まさかにね、本當のことでせうか。大河内は陳述を進めた……彼はリタニ宮殿から那須が持つて來た葡萄酒を氣絶したマラに與へた、マラは急に生氣を回復した、そしてマラは變形して照人王陛下となつて顯はれたのである。

式場の人々は事が餘りに意外であつたから一語も發することが出来なかつた。ただ彼等は大河内の顔を茫然と見詰めてゐた。不二子嬢は悲鳴をあげて父照人王の腕を掴んだ。

「お父さん、本當ですか、お父さん、あなたはマラの變形ですつて……」

照人王は不二子嬢の背中を軽くたたいた。それは如何にも親らしい態度であつた。然し彼は何とも

言はずにただ微笑してゐた。

不二子嬢は大河内に叫んだ。

「それは本當なのですか？」

「私は虚言を吐きません。」と大河内は不二子嬢に答へたといふよりは、寧ろ場内の群集に聞えるやうに四角張つた聲で叫んだ。そして彼は不二子嬢の眼を見詰めた。彼女の眼は大河内の心を讀むことの出来る眼である。それは大河内に特殊な雄辯の眼である、文字を知らずに文意を通じて来る不思議な眼である。大河内はこれ等二つの眼を一緒にカラ山上宮殿の胸壁から月光を眺めたのである。彼はそれ等の二つの眼を疑はなかつた。不二子嬢の兩眼は大河内に「私はあなたを信じます」といつた。假令他の千人が大河内の言葉を疑つても、不二子嬢さへ彼を信するなれば彼はそれで十分であるとさへ思つたのである。

不二子嬢は玉座から起ちあがつた、そして朗かな小さい聲で式場に宣言した。

「私の人々よ、私はあなた達の眞實なる理解に訴へます。私は大河内さんが事實をお語りになつたと信じてゐます。確に大河内さんの言葉は眞實であります。私が伯爵に要求する所は外でありませぬ、伯爵は立つてあなた達に明瞭にこの告發に答へねばならない責任があるといふことであります。」
この時照人王は不二子嬢に囁いた。
「よくやつた、完全な態度だ。」

次の瞬間に大きな帝王の間の隅から隅まで耳語が溢れた。群集の人々は互に顔を見合せて互に尋ねた、互に答へた。恰も永らく閉込められた暴風雨が一度に雲を破つたかのやうに群集は叫んだ。

「賛成、賛成、伯爵をして答へしめよ。」

第二十章 タビットの没落

屋の額に象形文字が書いてあるが、光つてゐる場合にはそれが明瞭でない。然しその光輝が薄らいで来ると象形文字が漠然としてゐるにしても、それが下界の人々の眼にも映つて来る。伯爵タビットは正にこの屋の如しであつて、これまでは彼の世界が凹彫になつた寶石のやうに「今日只今」を謳歌してゐたので、彼の顔はただ光つてばかりゐたが、大河内の峻烈な詰問に會つてから急に變化して来た、即ち不安な象形文字がその上に顯はれて来たのである。然し彼の權威を以て人に迫る壯大な態度と静寂な表情が彼を見捨てたのでない。それも恰も屋の光が薄らいで顔の象形文字が見えるやうになつて天空高くかかつてゐるやうなものだつた。

彼は今立つて發言しようとした。騒々しかつた式場内の群集は直に靜かになつた。假令彼が群集の信任を失ひかけた所があるにしても彼の絶對的威力はまだまだ地に落ちたのでないと思はれた。
「ヤクキ島民の意見に私は謹聽ある雅量を失つてゐない、私を信頼して欲しい。」とタビット伯は語り出した。「私の右の手は島民の手と握り合つてゐる。その替りに島民も國の法律に忠義たることを誓

つて貰ひたい。女王殿下は諸君の眼前にあつて、國の法律に依つて既に王冠を戴かれたのである。それは諸君が明瞭に認めた所であつて一人たりともそれを否定することが出来ない。國王陛下が失踪のなから顯示し給つたことは、私の島民と共に喜ぶ所であることはいふまでもないが、女王殿下が諸君の前で誓はれた神聖な誓約を陛下も否定することは不可能であらねばならない。故に女王殿下が向後國王陛下の右の手となつて島民の幸福と安寧をお計り下さることに於ては何等の疑念を挟む餘地がないのである。私は女王殿下が私との結婚を守つて下さる、即ち國法を遵奉して下さるものと信じてゐます。それは最高地位にある人の當然のことであつて、さもないと島民に法律の權威を強ひることが出来ない。戴冠式は日出度終りましたことは私の深く喜ぶ所であります。勿論私は島民全體に奉仕する職責にあるものとして諸君の利益のため如何なる言葉にも謹聽するものであります。國の法律は神聖にして犯すことの出来ないものであるが、もともとヤクキ第一の帝王アリアル陛下が自然の法律に則つて定められたもので、それを否定するといふことは取りも直さず神様への冒瀆たることを意味してゐることを附言したのであります。」

伯爵の聲は柔和で滑かで、言葉がよく洗練されて一點の隙がなく意識を以て完全に配置されたの感があつた。それを譬へると滔々と流れる河の水か或は空を飛ぶ規則正しい鳥の羽翼の如しであつた。この音聲爽かな雄辯が群衆の沈黙を生んだといふことは斷言が出来なかつたが、場内の人々は悉く視線を不二子嬢の方へ向けた。伯爵タビットは自分が有利の状態にあることを見て取つた。それで彼

は軽い會釋を不二子嬢へしながら、靜かに照人王陛下の前に顯はれ嚴肅な敬禮をした後、その面前に額づいた。この時彼が着てゐた白衣の着物は海岸を愛撫する波のやうに靜かな曲線を描いた。

伯爵タビットは王様にいつた。

「陛下、私は價値のない不束な臣下の一人であることを知つて居ります。然し最高委員會議の決議もありました。全島民の希望もありますのでどうか私と女王殿下との結婚を御裁下されたい。陛下、願はくば私の熱心な希望をお聞き下さい。」

照人王は玉座椅子に頭を後に凭れかけられた。彼は考へた、また自分が陛下と呼びかけられるのが妙な氣のものだと自分の地位を疑はないでもなかつた。彼は伯爵の方へ向いていつた。

「許すも許さないも女王殿下の心持にあることだ。人々はみな不可能のことを夢みる不可能の動物だ。私自身もさうだ、自然である、尋常である、正當であるのはただ妖鬼怪物のみである。私共人間には如何ともしがたい個性がある。私は他の意見を如何ともすることが出来ない。」

「女王殿下には」と伯爵は王様に答へた。「既にそれを誓約して居られます。この點に關しては本場内に參列してられる最高官吏諸君並に島民の等しく認める所であります。」

照人王はこれまで動かなかつた二つの眉を上下に動かした。彼は獨語するやうに低い聲でいつた。

「日本人はどこへ行つても日本人でありたい。また日本人は何處でも自分の意志に従つて行動し得る權利がある。ヤクキへ来たからとてその法律で束縛される必要がない……いづれにしても女王殿下の

意思を尊重しなければならぬ。

大河内は少し離れた場所からタビット伯爵が照人王様に何を迫つてゐるかをほぼ想像することが出来た。もとより彼は王様を信じてゐるがどんな場合に變化しないとも限らないとて、王様がどんなことを伯爵に答へられるかと體を前へ乗りださせ、固唾を飲んで王様の言葉を待った。

福原夫人は玉座の側に坐つてゐたので照人王が獨語した言葉を聞くことが出来た。もとより自分の姪が南洋の土人に近いヤクキ人に結婚することを喜ぶものでなかつたが、彼女が皇后陛下になつて全島民の尊敬を集めることを不愉快には感じなかつた。故に賛成も不賛成もさし控へてゐた、そして自然の開展のままに事件の成行を眺めようといふ立場を取つた。彼女は心のなかで思つた。「ヤクキが千年も他の世界より進んでゐるかどうかは知らないが、前に想像したやうに悪い島でない。この島の皇后様を姪とすることは満更排斥したことでもない。」

照人王は小さい柔和なしかも明快な言葉で不二子嬢にいつた。

「選擇の權がお前にあるのだ、少しも遠慮に及ばないよ。」

この言葉を場内の誰も聞くことが出来なかつた。

不二子嬢の眼には人々の顔がちらちら揺れて終ひにはその恰好が曖昧不明瞭になつて、眼前に横たはる一面の汚い紙か疊かのやうに思はれた。場内でこそ語り合ふ人々の聲は道行く人が路傍で立ちばなししてゐる聲のやうに聞えた。彼女は伯爵タビットの顔を見上げたが、その態度はただ機械的

にしたので何の意味があるとは思はれなかつた。そして彼女は直ぐ側を向いた。彼女は何か彼女を救助することが今にも突發して来るやうな感じがした。彼女は勿論運命といふ奴がどんな顔をしてゐるかを知らない、また彼女はそれを間近に見たといふ經驗もないので、運命などと人を威しつける抜きさし出来ないものがあるとうして思はれなかつた。それは婦人的空頼みといふものかは知らないが、事件をただ長びかしてさへして置けば何かが邪魔をして好轉換を與へて呉れるとも信じてゐたらしい……この點は世界初まつて以來善良な婦人に共通な性質であるといつて差支がない。不二子嬢は漠然と思つた。「このヤクキが人のいふ如く神聖な島であるならば、何處かに弱きを助ける神様が女神様が出て来て『一寸お待ち』とか何とか言ひさうなものだ」彼女は見るともなしに大河内の方へ顔を向けた。それから父の照人王の顔も眺めた。選擇の權があるからタビット伯爵は嫌ひだといふことは簡單だが、多少はその後どうなるといふことも考へねばならない。彼女は兎に角さう直に事務的にことを運んでゆくことを愉快に思はなかつた。この事務的な手段は確に彼女の婦人性と夢とを破壊したに相違なかつた。

この瞬間に式場の入口が急に騒々しくなつた……場内への闖入者が顯はれたのである。近衛の番兵は闖入者を防害しようとして、闖入者との激しい争闘が始まつた。闖入者は力強い番兵のために側に投げられたが、直に起きあがつて巧に番兵に抵抗した。ために時ならぬ争闘の場面が展開されるに至つた。式場内の最高委員や一般島民は何事かと驚きたつて入口に於ける騒々しさを一層騒々しいもの

にした。ところで間もなくこの騒擾が静まった時式場に不思議な二人の男が顯はれた。大河内は彼等を見て、「どうしてこんなへ来たのか。」と叫ばざるを得なかつた。闖入者は誰でもなかつた。大河内等と落霜紅の古塔で分れてアロハ丸へ歸つた小柴とジ・ウジとが再び戻つて来てこの式場へ入つて来たのである。

小柴は大河内を見て叫んだ。

「大河内、早く遊船へ歸る用意をし給へ、こんな所に愚圖ぐづしてゐるととんだ目に遇ふよ。何が十分後に起つて来るか知れたものでない……ああ、險呑千萬な島だ。」

小柴は玉のやうな汗でびしょ濡れになつてゐた。彼の洋服に泥が一杯にくっつき、頬や手や腕の見える處などに岩や荆棘で掻きむしられたあとがあつた。彼は危險な絶壁を再びよち登つて来たといふ痕跡を明瞭に示してゐた。彼は非常に激してゐたといふことは彼の動悸が激しかつた點から想像することが出来た。大河内は小柴に注意するよりは、今や玉座の前に毅然として一人の女性に注意を集中したのである。彼女は赤道直下の熱い太陽に皮膚を眞黒にされた女神のやうで、その女神が復讐の念に燃えてゐると思はれた。汚い五目編の安つばい着物を着けてはゐたが、その古典的人品骨柄は由緒ありげに見えた。大河内は一見この女を見るなり直に東中野を遠く離れない所の東郷感化院の一家を念頭に浮べざるを得なかつた。「ああ、彼女に相違ない……一言も吐かなかつた例の眞黒の女だ。安藤夫人と藤井夏子女史と共に聖歌を黙誦した女だ。どうして彼女がここへ来たのだらう。」

彼女は大きな聲で叫んだ。

「これはどうした恐ろしいことです……すべてを止めて下さい！」

伯爵タビットが彼女の憤怒に燃える顔面を眺めた時、彼の顔色に一大變化を示したことが直に認められた。然しその變化は多少非現實的な所があつて彼の優美な線を破るほどのものではなかつたが、漸次に恐怖の一種と變はつた時必ずしも説明されない程度のもものではなかつた。確かに伯爵タビットは彼女を恐れねばならない或物を心のなかに持つてゐたのである……伯爵が彼女を恐れる理由は何であつたか。

大河内は彼女が今にもタビットに飛付きさうな氣色を認めた。不二子嬢は伯爵を疑ふといつたやうな表情をした。ヤクキ島政府の大官連や最高委員の人々は立ちあがつた。この時ジ・ウジは大河内に耳語した。そしてジ・ウジの彼に語つた所は大略左の如しであつた。

「彼女は東京のどこかに監禁されてゐたらしかつたのですが、工合よくそこを抜け出したものらしくつた。横濱の海岸をうろ附いてゐるうちに、海賊船に拾はれた。彼女は驚くやうな寶石を腕や手首や首筋につけてゐたのでそれを船長に見せて、かういふ寶石が濱の眞砂のやうに無盡藏にある島へ連れて行かうと申入れた。海賊船長は非常に喜んで彼女のいふがままを信じて航路を取つた。彼女はどういふ航海の祕密を握つてゐたものか、兎に角海賊船をヤクキ島の前でアロハ丸の碇泊してゐる邊まで持つて来た。所で彼女は自分が島へ許可なしに海賊船を誘つて来たことを恐れたものか、態とその船

を暗礁にぶつ附からせて難船させてしまった。彼女はいふまでもなく水泳の達人であつたので平氣で波を切つて泳いでゐたところをアロハ丸が救助したのである。彼女はアロハ丸の船員の誰にも自分のことを詳しくは語らなかつたが、確に重大な問題に無くてはならないやうに感じられた。それで小柴とジョウジが未明にアロハ丸を後にし、例の斷岸絶壁を攀のぼつて漸く今この帝王の間へ着いたのである。

ジョウジは附言した。

「彼女は道みち『男といふ奴は野獸に等しい』といふことを怒鳴り續けました。餘程男に怨があるらしいです……所で私共は彼女の敵はタビット伯だと目星を付けました。何しろ勇敢な女ですよ。今に御覽なさいまし、面白い芝居を打ちますでせう。」

彼女の「どうした恐ろしいことですか」の言葉は明瞭に式場に響き渡つた。彼女の「すべてを止めて下さい」の言葉は矢か槍のやうに式場に飛んだ。彼女のあらあらしい兩眼は伯爵タビットの顔を離れなかつた。彼女はどういふ印象を今大河内に興へたかといふに、彼は彼が初めて彼女を東郷感化院で見た以來随分變化してゐるのに驚いた。もとより今も以前のやうに眞黒の女に相違ないが、彼女は以前は監禁の檻のなかに入れて野性の牙や爪を封じられてゐた。然るに今は彼女を束縛する鎖もなければ縄もない。彼女は以前言葉を封じられて無言の苦痛に悩んだのであつたが、今は喋べりたいだけ喋ることの出来る自由の身である。然し彼の苦痛は想像の出来ない程激しいものであることは容易

に想像されたのである。

彼女は叫んだ。

「伯爵様、私はあなたから言葉を止められてゐましたが、今は御命令を守ることが出来ません。私は自分自身の決心でああなたの御命令を破ります。私は最早やあなたを恐れませんが、またあなたの御命令を踏みにじます。あなたは私に一言の言葉もおかけ下さらない……これはどうしたことか御座いますか。私はあなたの御命令で今あなたが御結婚なされようとなさる御婦人を殺害しようといつたしました。私はその仕事に失敗いたしました。これはどうしたことか御座います。あなたは殺せと仰つた御婦人に今結婚を強ひようとしておいでになります。」

「女を連れ出してしまへ、彼女は狂人だ。」と伯爵タビットは簡単に叫んだ。

彼女は明瞭な言葉でいつた。

「私は虚言を申しません、私の語る所は悉く本當の事實で御座います、どうぞ私を信じてお聞き下さい。私はメリタの町のもので御座いますが、今日こゝに御参列中のお方は私を知つておいでの人も有りませう。私はヤクキ島のために身を犠牲にする事を意としませんでした。他に幾人も私同様の婦人が居りました。伯爵様、私はそれ等の婦人に替つてあなたを弾劾いたします。ゲルヤは今どこに居りますか、イバラは今どこに居りますか、カブラは今どこに居りますか、ツラは今どこに居りますか。彼等の親族一同は彼等の行方を失つて日夜泣いて居ります。彼等の行方を知つてゐるのはあなた

です。あなたはどきどきいふ御返答を彼等の身内のものに與へなさいますか？」
すると眞黒の女即ちエリザがあげたゲルヤ、イバラ、カブラ、ツラ達の親類眷屬のものが参列者のなかにあて互ひに耳語し合ひ或は啜泣し始めた。しかし伯爵の聲が響き始めた時式場は再び沈黙に入つた。

「彼等が今どこにあるといふのか？」とタビット伯は答へた。「どこにあるものもない、ヤクキ鳥民はみなよく知つてある筈だ。彼等は地上生活の壽命が盡きて死んだではないか。」

タビット伯はかういつて顔をあげた。彼の顔は微動だもしなかつた。彼は靜かに場内の群衆をじろじろと眺めた。そして彼は嘲弄氣味の眼付きでエリザを見た。然しエリザはタビットを恐れるやうな氣色がなかつた。彼女は顔青ざめ熱心に満ちた場内の人々の方へ向つて叫んだ。

「ヤクキの人々よ、私のいふ言葉を信じてお聞き下さい。伯爵様は彼等が自然の死を迎へられたやうに仰いました。それは眞赤な虚言で御座います。事實彼等は生きてゐて現にメッドやメリタの町をうろ付いて居ります。然し彼等はもとの姿を失ひ、この不自然な變形につれて彼等の性質も動作も全く異つたものとなつて居ります。故に彼等の身内の人々でも彼等を認めることが出来ず、たゞ枯枝のやうによぼよぼ震へ、全身が麻痺して自分で自分を知ることの出来ない程老耄し果てた哀れな人間の屑が通る位にしか思はないのでありませう……私が皆様に訴へたいのは他でもありません、誰が彼等の以前の若々しさを奪つてしまつたか、誰が彼等の以前の美貌を吹き消すやうに無くしてしまつたか。誰が幾百歳になつてゐるか知れないほどの皺を與へたか、誰が彼等をして身内のものでさへ認めることの出来ないほどの見悪い形相と變らしめたか。その無慈悲な下手人は誰でもない、伯爵タビット様であります、伯爵様の恐ろしい魔法の致した所であります。伯爵様は秘密の知識を持つて居られます……それを善用せられます間は私共は伯爵様の偉大を禮讃するのみで御座います。伯爵様は怪奇な魔の葡萄酒を持つて居られます。私共か一度これに觸れると老木の花のやうに枯れた體に青春の花を咲かせることが出来ます。それと同時に伯爵様はもう一つ不思議な薬用水を持つて居られます……これは人間の青春を奪つて老衰に替へる偉力を顯はすもので、伯爵様はしばしばこれを自分の敵視される人間に施されたのであります。」

エリザは今自分の言葉がどういふ感動を場内の人々に與へたかを見廻した。そして彼女は言葉をなほも續けた。

「オプロはリタニ宮殿の番兵の一人でしたが、伯爵様の御機嫌に逆つたといふので、毒の葡萄酒を飲まされて伯爵様にその青春を奪はれました。メリタの太守イツバル様もまた若いカール王も伯爵様の野心を邪魔する有害物と見込まれまして、伯爵様のため手荒い手段にかゝりました。それ等の人々は昔のお面影なく人のそれを思ふことの出来ない程な變化をして町なかをうろ付いて居ります。まことに伯爵様は言語に絶した恐ろしいお方で御座います。」

不二子嬢はエリザの驚くべき物語を聞いて悲鳴をあげた。然しこの悲鳴は彼女が語つた奇怪な恐怖

からでなく、寧ろ大河内が照人王について陳述した所を肯定する奇蹟的暗合に驚いたからであつた。大河内もエリザの陳述を聞いた。……彼女が彼の所説を裏書した時、ますます彼は非現実的な幽怪の感じに深まり行くやうに思つた。然し彼は思つた。「如何にそれが非現実的であるにしても、また幽怪極まるにしても、事實は事實でどうともすることも出来ない。自分がカラ山上の地下室で、狂人マラの死んだ體に葡萄酒を注いで照人王様を得たことは疑ひもない事實である」

照人王様は心のなかで思はれた。「自分が果してタビットが與へた魔の葡萄酒の結果マラと變形したかどつかは知ることが出来ない。然し自分の意識は三箇月餘も前にタビットに招かれ晚餐を共にして、食後の談笑は夢のやうに甘かつたといふ記憶があるが、その以後に及ぶことが出来ない。してみると自分はあの時伯爵に老衰の酒を盛られたに相違ない。自分が王城の地下室で大河内に飲まされたのは不思議にも青春の靈酒であつて、その力で生命を回復しもとの照人に返つたものらしい。何れにしてもたゞ不思議と言はねばならない」照人王様は非常な興味をエリザの陳述に感じた。彼はタビット伯に向いて叫んだ。

「閣下、彼女の陳述は實際ですか。どうか御否定して下さい。私は彼女を信じたいのです。私はあなたを否定なさるより寧ろ肯定なさつて、更にもつと多くの祕密を語つて下さるのを希望して止みません。」

照人王はかういつて微笑した。伯爵タビットはその微笑につれて微笑せざるを得なかつた。彼は立

ち上つて玉座の側へ行つた。その様子が王様の命令に服従したといふよりは精神的磁力に引きずられたといつたやうな恰好であつた。伯爵はいつた。

「ヤクキ島民は私が今不可能な陰謀に囚れたことを知るであらう。しかもその陰謀が私の手厚い待遇を受けた人々に依つてなされたことを遺憾に感じざるを得ません。私は國王陛下を援助しました、如何となれば彼が私の王様であり、私が彼に忠節を守ることが當然の義務であつたからであります。然し今や私は断然たる決意を示さねばならない時に到達しました。私の國王に對する誠意が彼を底はしめました。國王は不思議に雲隠れされ、今玉座にお歸りになりましたが、當然の責任として國家相傳の寶石の行方を明かにすべきだと信じます。私は國王を非難するの權利を得たい。彼は何處にヤクキ王家の寶物箱を隠して居られるか、私は陛下の御返答を要求するのであります。」

大河内は今朝カラ山上の地下室で目覺めて以來、事件が廻り燈籠のやうに目まぐるしく眼前に動揺したので、彼がアリバル王様の墓碑の下の暗黒の部屋の中かで老マラの手の下で燃えた寶石の柔和な火のことをすつかり忘れてゐたのである。那須とジャボに彼が発見されて、彼が照人王様を伴つて地上へ出た時は、地下室から地上の廊下へ出る普通の階段を上つたのである。故に那須もジャボもアリバル王様の墳墓にある寶石については何事も知らなかつたのである。大河内は確信を以て所謂ヤクキ島の寶物の所在を知つてゐるのである。然し今照人王がどんな返答をタビット伯に與へられるかと息を殺して待つた。

照人王はにつこり笑つた。彼は頷いた。その態度は全く冷靜なものであつた。彼はいつた。

「私はそれについて全く失念してゐた。私は今お答へする機会を與へられたことを伯爵に感謝しなければならぬ。」

場内の人々は水を打つたやうに靜まりかへつた。彼等の沈黙は驚駭の沈黙で、多少の疑念がそのうちに含まれてゐた。

照人王は語り始めた。

「私は白状いたしますが、王家世襲の寶物が見えなくなつたといふことの責任者は私であるので御座います。今私はヤクキ島全民にお答へします……その寶物はカラ山にある宮殿の地下室に隠してあります。寶物は確に安全であるから島民諸君は安心して下さい。丁度三箇月前で、私は伯爵と晚餐を共にしました時、偶然に私はこの島が私に取つて重大な意義のあることを發見いたしました。それは外でもありませんが、本島は世界のいづこよりも放射光を發する礦物に豊潤であること御座います。私はこのことを發見しまして、未だ曾て感じたことのない程の喜ばしい興味を覺えました。私は王宮の居間の天井に暗黒の夜に煌々と星のやうに輝く不思議なもの、光景に接して、本島が或は放射光礦物を産出する幸運に浴してゐるのではないかと疑ひました。私はシミラ皇后陛下の仕事場に入りまして、金剛質ウラニウムの多量と其他いろいろのものを見出しまして、私の科學に對する實驗慾が一度に昇上するのを感じました。そして私はかゝる立派な標本の蒐集を見ました時、諸君の祖先は疑ひもなく科學研究の熱火に燃えてゐたのであることを知りました。私がシミラ皇后様の仕事場で見出した器具やその装置は殆ど完全に近い程度であることを知りました。若し諸君にして特殊の興味があるならば、私は喜んで如何にその器具が働かを実験してお眼にかけるであります。私はこの種の實驗を非常に喜ぶものであることをこゝに明言いたします。私は序ですから今發表することを許していただきたいのは、私はダリアスの金剛石に最も驚くべき發光をさせることに成功いたしましたこと御座います。」

場内の人々は茫然として照人王陛下の陳述を聞いてゐた。もとより彼等は王様の科學慾に燃えてゐられたことを始めて知つたが、それに對する興味は大なるものでなかつた。然し彼等は今ヤクキ島に無くてならない寶物の所在が明瞭になつたことを喜んだ。彼等に照人王の陳述を疑はねばならないといふ理由も無かつたので、彼が陳述するまゝを信じたのである。そして彼等が最も喜ばしく思つた所は、寶石失踪のため重大な課税を背負はねばならなかつたが今それから無事に逃れることの出來た點にあつた。

場内の人々は歡喜に溢れてどよめき渡つたやうであつた。照人王が再び聲を新しくして語りだしたので、彼等はまた最初の靜肅に入つた。

照人王陛下は斷然たる聲を一層大きくしてタピット伯にいつた。

「伯爵タビット、最高委員會の諸君も、またヤクキ島民もこの女に對するあなたの返答を待つてゐます。彼等は非常な興味を以てあなたが如何に答へられるであらうかと息を殺して居ります。あなたは明瞭な返答を與へねばならない。」

伯爵は例の柔和な落着いた態度で答へた。

「國家の寶物が安全であることをお聞きしてこの位喜ばしいことは有りません。この點は最高委員會の諸君も、またヤクキ島民諸君も私と同感であるだらうと信じます。所で私を非難攻撃した狂女に對する返答に移りますが、私は至極簡單な返答しか持つてゐません。若し彼女の陳述が眞實であるとしても、私はそれに反對することが出来ません、如何となれば私はその反對理由を明瞭に答へることが出来ないからであります。それと同時に私はまた彼女の陳述を眞實だとも是認することが出来ません、如何となれば私にそれを認めるだけの告白もないからであります。詰り眞實でないとも反對ですとも、また眞實だとも言はない立場にあります。畢竟するに彼女の陳述は無駄話同様に無價値のものだといふことに歸します。私はそれに對して返答する必要を認めません。」

この時大河内は座席から飛びあがつた。那須も「何をいふ、人を馬鹿にするな。」と怒鳴つた。そして彼はタビットの座席を目がけて詰めよらうとした。小柴もジョウジも同じやうな態度を取つた。大河内は玉座の前に仁王立ちになつて叫んだ。

「なに無駄話同様だ、無價値だ……僕等の陳述が無價値だ、返答の必要なしだ。よろしい、それなら

ば君の返答の出来るやうにしてやらう。僕は君の人民の面前で君の面皮を剥いで見せる。」

かう彼は怒鳴つて、直に上着の内懐のなかから玉髓の葡萄酒瓶を取りだした。そして彼はそれをタビット伯の鼻先にさしだして怒鳴つた。

「これをお飲みなさい！」

この葡萄酒はいふまでもなくカラ山宮殿の地下室で照人王いなマラが飲んだ所のものである。

場内の人々は大河内の聲に應じて動搖し始めた。彼等の着物のがさがさいふ音が、遠方から聞える風のやうに響いた。大河内のタビット伯への挑戦が洪水の門を開いたやうで、群集の反感が一度にどつと流出せんとしたのである。群集もタビット伯の前へと寄せつけた。そして彼等は大河内の切つた火蓋に續いて叫んだ。

「閣下、早くお飲みなさい。」

そして彼等は足に穿いてある上草履をばたばたさせて帝王の間の敷石をたゝいた。その音が早く早く響いて伯爵の處決を迫るやうに響いた。

「皆さん、私を信じて下さい、タビット伯は確に悪漢であります。私は彼の知識を疑ふものでありませんが、彼が最後の判決を受けねばならない時が来たのであります。」

群集は一言も發しなかつたが大河内の言葉を是認したやうであつた。玉座の側に參列してゐた最高等の諸役人はてんで座席を離れた。その様子は「タビットを打棄つて置け、彼自身が隨意に決算を

するだらう」といつたやうであつた。

タビッ下伯は決して卑怯な男でなかつた、彼は當然の運命を如何にもして逃れようとするやうな淺ましい男ではなかつた。彼は最後まで氣品を維持して運命に面接することを辭しなかつた。彼が正道を誤り罪惡を犯した場合にも、彼は少くも純白な態度でその處刑を受ける男であつた。彼は今青白い上品な顔をあげて立つた。彼の白い髪の毛は頭の廻りを後光の輪のやうに取り巻いた。彼の白い服装は部屋に純白な柔かい壁を背景としてかなり莊嚴な一つの繪畫を作つた。彼は懷中にしてゐた玉髓の葡萄酒瓶を取り出した。それは小さい瓶で青味を帯びてゐた。

彼は大河内の方を向いたが、場内の參列者一同に叫んだ。

「最早や私に青春の酒を飲む必要がない。私には老衰の毒酒こそ相應しい。私は今それを飲んで如何にそれが私共人間に襲つて來るかの祕密を示すのであるが、もとより私の實證を待たずに諸君が早かれ晩かれその襲撃を受けざるを得ない。然し私は今諸君に一足お先きに老衰の酒を頂戴する……時と青春は懐しい、然しそれもすべての祕密よりもつと大切な祕密を持つ人間にのみ必要だ。今や私に時の懐しさも青春の尊さもない。諸君、お去らば！」

伯爵はかう言ひ終つて酒瓶を唇にあてた。彼はそれを飲みほした時、玉髓の瓶は手から床の上へ落ちた。瓶は二つに破れた。彼は眼を閉ぢたが、朗かな聲で語り始めた……何を彼が語つたか。彼の語つた所は戀の苦痛であつた。いふまでもなく彼の物語は酒井不二子嬢を對照としたものであつた。

大河内はそれを聞きながら自分のことを語られてゐると感じた。彼は自然に現實と離れて行くやうに思つた……即ち彼には帝王の間も照人王様も最高委員會もヤクキ島の人々も消えて行つた。彼にアロハ丸の甲板から、初めてカラ山上王様の宮殿から輝く火を見た時の瞬間が甦つた、ヤクキといふ人間がたゞ憧憬のみで説明も記憶も出來ない島の光景が初めてその眼界に入つた時の瞬間が甦つた、彼がジャポとアコの案内で夜から山登りをして頂上に達してほつと一息ついた時の瞬間が甦つた、彼が不二子嬢と二人切りで「王様の」四阿で眼と眼を見合せ唇と唇とを合せた時の瞬間が甦つた。大河内はタビッ下伯が自分に替つて戀を物語つて呉れてゐるやうに感じた。彼は意識にかへつてタビッ下伯の言葉に耳を敬てた……彼の語つた所の言葉は一つ一つ明瞭であつたが、不思議にもその内部精神が聲の消えると共に空中に幻のやうに消えて空氣の一部となつてしまふかたさへ感じられた。

大河内は伯爵の物語を了解するでもなしました了解しないでもないといつたやうな夢心地で聞いた。伯爵は他の世界の人々がその祕密を握らうとして單に努力してゐる所を完全に掴んでゐるヤクキ島の知識程度を語つた。彼は力を強めていつた。「如何なる國の人々でも今日電燈を疑はない、電信を疑はない、また多くの場合に夢をも疑はない、それと同じ確信を以て私共は私共の神祕を信する。そしてそれを信する時眼前の黒い幕はするつと上がつてゆく、その時私共は最早や暗黒の中を盲探してはゐない、現在と將來との比較價值が明瞭になる、人間再生の意義も過去の存在も確實に證明されて來

る。人々が知らねばならないこと、偶然に忘れてしまった夢、若し人が目覚めても記憶するならば他人に語ることの出来る睡眠中の耳語、意志集中の瞬間に念頭に煌き渡る言葉、すべての人間が夢みてる科学上の希望が完成された歡喜、將に死なんとする人の眼に顯はれ唇に響く斷片的な真理の眞き、あゝ、私共はこれ等のものを自然に認識し必然的に實行することの心理状態を創造することが出来る。

大河内は伯爵の語つてゐる所の言葉が自分にも近いものであるやうに感じた。彼が不二子嬢と眞實の戀を語り合つて以來、如何なる不可能も可能となり、現實は瞬間的に精神化すると感じた時、彼も確にヤクキ鳥人のやうに第四次元式はそれ以上の次元の程度に進んでゆくかのやうに思つた。彼は心のなかで思つた。「伯爵の語る所は必ずしも神祕でない。自分に戀といふ鍵がある、この鍵で自分はずべての祕密を開ける……」

大河内は式場内の人々を眺めた。彼等は勿論伯爵の語つた所を了解したに相違ない。然し大河内はその了解の點では彼等以下でないと思つた。彼は今更のやうに女性に對する戀の神祕を感じた……この神祕がすべての神祕の中心をなしてゐる所のものと彼は信じたのである。彼は再び心のなかに如何に彼が勇氣に満ちてヤクキの神祕鳥入りをしたかを思ひ浮べた時、彼は實際に伯爵の語る所の祕密と彼の戀に信ずる所の祕密との間に何の相違があるかを知らなかつた。

タビット伯は不二子嬢に顔を向けた。然し彼は彼女を見ることを何となく恐ろしく感じたやうに見

えた、如何となれば彼女は彼の戀を斷然として否定したからである、いな、如何となれば彼の卑しい計畫が暴露して彼女に彼を輕蔑する理由を與へたからである。彼は心のなかで「それも戀のためである」といふことを彼女が了解して呉れるならば彼はそれで満足すると思つた。彼女は彼を了解したであらうか。タビット伯は不二子嬢の熱心な清々しい眼を見た。然しその眼は彼を非難し詰問する眼であるやうに彼は感じた。彼は震へた、そしてその顔を側に向けた。伯爵はいつた。「……時と青春は懐しい、然しそれもすべての祕密よりもつと大切な祕密を持つ人間にのみ必要だ。今や私に時の懐しさも青春の尊さもない。諸君、お去らば！」不二子嬢に伯爵に對する同情がなかつたのでなかつた。彼女は伯爵を氣の毒に思つた。そして彼女が彼の語る所の言葉を聞いた時、彼女はその意味の全部を了解しようとしなかつたが、時々一つの言葉は或は一つの文句が恰も暗夜に目覺めて思ひ出した言葉や文句のやうに、薄暗い影の道をころころ轉つてゆくやうに彼女は感じた。そしてこの言葉や文句は彼女が思ひ出さうと思つても到底記憶に甦らせることの出来なかつたのを、今伯爵が語つて呉れたもののやうに思つた。彼の言葉には深い意味があつて、恰も深い海の底のやうであつたが、彼女の胸を打つた一つの言葉や乃至一つの文句が魚のやうに彼の言葉の海を泳いだ。「刹那刹那の階段を上ると永劫の空が青く光つてゐる」「これまでは壁に過ぎなかつたが今はそれが窓となつて開いた」「幻

が雪のやうに降つて地上の春を甦らした」彼女はこれ等の言葉から非常に教えられる所があつたことに感謝したが、伯爵の顔がいつか眞白の壁のやうに見えて來て何の興味も與へないと思つた。そ

の時彼女は彼を敵視しないと感じた。

伯爵が言語を止めた時廣い大きな帝王の間は沈黙に落ちた。丁度人が森林のなかに強い恐ろしい風が吹いてゐるとは知つてゐても一つの葉も一つの枝も動かないといふ場合があるやうに、場内の人々の心は動揺してはゐたが一言も發しなかつたのである。伯爵タビットは白い着物を體に巻いて玉座に着席した時、ただ茫然として人々は彼を眺めるのみであつた。人々は眼さへ動かさなかつた、如何となれば、彼等はタビット伯爵の外何物も見ではならないと思つたからである。いな、如何となれば伯爵の顔色が一刻一刻に變化してゆくのであつたからである。恰も人がどういふ工合に夜の黒色が迫つて来るかを語ることの出来ないやうに、或はまた樹木の枯れて地上に落ちる様子を言葉で語ることの出来ないやうに、彼等はただタビット伯爵の變化し行くのを茫然と眺めてゐたのである。そして彼等はそれに驚いてゐたのである。

諸君は夜の空へ立ち登る一筋の煙が如何に不思議な姿を備へてゐるかを注意したことがあるか……タビットは正にその煙のやうに實在を失つて今は一つの麥稈人形となつたのである。彼の着てゐる白い着物の袖や裾がさがさと動いて「お去らば一足お先きへ」と響いたと人々が感じた時、彼の形を失つた二本の手が彼の着物のなかにだらりと垂れた……然らば彼は死んだかといふに、彼は死んだのでない。彼は老衰の呪咀を受けてゐるのである。彼は枯葉のやうに青春を失つて老衰の海岸を風のやうに彷徨ふのみであらう。

場内にあるすべての参列者は内閣總理大臣、最高委員會員等を初めとして、悉く悲鳴を發して顔を両手で蔽つた。彼等は叫んだ。「あゝ、恐ろしい！」

彼等の悲鳴が落着いて靜まつた時彼等は汐のやうにとつと入口を目がけて雪崩を打つた。玉座に寂しく人間のやうな人間でないやうな白い骨の魂を後に殘して、彼等はそれを振りかへつて見ながら恐ろしいものから逃げるやうに急いで外部の太陽に觸れようとした。さしもに廣い帝王の間は荒涼たる砂漠のやうになつた、そしてこの砂漠に獨り寂しい息をしてゐたのが伯爵タビットであつた。

タビットの玉座の側に一人の女性が殘つた。それは誰でもない、所謂眞黒の女エリザであつた。彼女は彼の玉座の側に膝まづいた、そして、タビットの今にも粉微塵に毀けさうな白骨の足をひしと抱いた。

第二十一章 歸 航

「お茶を飲みませうか？」と洒井嬢は大河内に尋ねた。

「頂戴ませう。」と大河内は彼女に答へた。彼の心は歡喜に満ちた。彼は甲板用の座蒲團を長い籐椅子の上に敷いてその上へどつかと腰を下した。風はそよそよと吹いた。天は新しく群青色に塗りたてられて一片の雲もその完全を破らなかつた。眼前には彼が馬蹄で蹂躪した古戰場といつたやうな姿のヤクキが默然として寂しく横たはつてゐる。彼は今この不思議な第四次元の鳥を離れようとしてゐる。

る。彼は思った。「自分は折角見出した神祕の島を失うたが何の遺憾もない、如何となればその替りに戀といふもう一つ異つた第四次元の世界を手に入れたからである」彼は不二子嬢を見上げて再びいつた。

「不二子さん、お茶を頂戴しませう。」

「お砂糖をいくつ入れませうか？」

「三つ入れて下さい。」

大河内はかう答へて不二子嬢の指先を眺めた、そしてそれ等が白魚のやうに花車だと思つた。彼女は實際に纖弱い一婦人に過ぎなかつたが、タビットの没落まで勇敢に奮闘した……大河内は戦争の殊勳者はいふまでもなく不二子嬢であると思つて熱い感謝の涙を彼女に捧げてゐる。今は「戦後の目度いお茶だ」と思つて、彼は甲板椅子に腰をかけて勝利の法悦に酔つてゐる。彼は現實と非現實とが見事にからみ合ふ世界でお茶を飲むといふことは天國の喜びであると心の底から思つた。彼は非現實なヤクキ島を離れてもまだ現實が明瞭に顯はれないといふ薄暮の世界を味つてゐる。彼は恐らく二度とは體驗することが出来ないであらうと想像されるこの瞬間を十分に味はねばならないと思つた。

「お茶の飲みたいお方はありませんか？」と不二子嬢は聲を張りあげて叫んだ、そして甲板の上を見廻した。誰も彼女に答へるものがなかつた。然し不二子嬢も大河内も誰もお茶に加はらないことを結局嬉しいと心のなかで感じた。

今しがた前に船長は甲板へ顯はれて、アロハ丸の出帆はいよいよ五分間内であるといふことを觸廻つた、然し大河内はそれが五分間だらうが一時間内だらうがそれはどうでもいい、ただかうして不二子嬢とさし向つてお茶を飲んでさへ居れば、ブラウニングの句ではないが「神様は天に在し世界はすべて正し」であると思つて微笑した。

那須次郎と駒子嬢はどこにゐるかと思つて見ると彼等は船の舳の隅に陣取つて人目にさう觸れないやうにして低聲で話し合つてゐる。その側を通る船員でもあると彼等は妙ににやつと笑つた。もとより那須も駒子嬢も人がどんなに笑はうとそんなことには頓着しなかつた。戀は實に強い刺戟劑だ、人が一度それを飲むと自制心を忘れて了ふ、他人の思惑など考へては居られない。那須も駒子嬢も大河内と不二子嬢と同様に自分だけの世界の繁榮をのみ祈つてゐる。後藤辯護士は小柴勝次を捉へて談話に耽つてゐる。この兩人も自分自身で自分等が重要な登場人物でないことをよく知つてゐるが、それでも振り當てられた役柄だけは完全に演じたといふ誇りを満更感じないでもなかつた。彼等は前記戀の二幅對の邪魔にならない少し離れた場所に陣取つてゐる。彼等の談話の題目はいふまでもなく、實際は小説よりもなほ一層に不思議なものだといふ一事であつた。小柴は大河内に組した後藤辯護士は不二子嬢に組してはるばる海上を渡つて冒険に参加したのであるが、それが無厭な經驗でなかつたことを互に心のなかで喜んだ。殊に後藤辯護士の方は娘が那須といふ適當な愛人を見出したことを私かに嬉しく思つてゐるやうに見えた。

福原貞子夫人は恰もチューブ入り齒磨から練齒磨を推し出して、了つた後のチューブのやうに體をぐにやぐにやにしてハンモックのなかに横になつてゐたが、思ひだしたやうに側に坐つてゐる照人を眺め、無言に愛の視線を交換し合つた。今まで神祕の島ヤクオの王様であつた酒井照人は今單純な一平民の照人であるが、その方がどの位氣輕るか知れないといつたやうな氣分を感じてゐる。然しそれでも滿更残り惜しい所が無いでもなかつた……彼は今夕日を受けて琥珀色に泡立つ海の波を越えて巍然として聳えたつたヤクオ島を眺めながら、獨語するやうにいづた。

「ただものに一寸觸れるといふことは愉快なものだ、ものを完全に掴むといふよりは指先でそれを弄つてみることをの方がどの位面白いかな……それが私の經驗だつた。一生王様で暮らさねばならないとなると確に苦痛であるに相違ないが、私のやうにしばらくの間王位に上つたといふことは忘れることの出来ない一つ話だ。詰り雲のなかを一日中歩くよりか虹の橋に立つて下界を眺めた方が遙に感動的だといふと同じだ。このことは理窟では知つてゐたが私は今それを體驗した。指先で弄る、舌で一寸嘗める、香氣を瞬間的に嗅ぐといふ寸時間の歡喜は全く譬へるに言葉がない。かういふ瞬間的感激は男性的永久性がない。もとよりそれは婦人的情調に属するもので、その感激に酔ふといふことは男子より女の方が得意とする所であらうか、私は今その妙味に觸れた……」

かう照人はいつて少し離れた所で大河内と密語喃々の爲體である不二子嬢を眺めた。嬢も父の電氣を感じたものか、照人の方を眺めてにつこりと微笑した。照人王舌普通の日本臣民である酒井照人は

微笑を彼女にかへしながら、言葉を續けて獨語した。

「若し不二子のはるばる島へ渡航して來て呉れなかつたならばどうなつてゐるであらう。自分がよぼよぼのマラとなつて幾百年も生きて行かなければ、結局自分はどうなつてゐるであらう。そして若し大河内が地下室で氣絶した時懷中に青春の酒を持つてゐなかつたならば、自分はまたどうなつてゐるだらう。何しろ不二子の冒險心があつて初めて事件がかう廻轉したとすると、自分は娘にどう感謝していいか知れない。」

大河内は照人の方を振り向いて彼に叫んだ。

「酒井さん、どうです、どこかにもう一つ空位の島があつてあなたを迎へたならあなたは王様になりますか？」

「第四次元なんて進んだ島ではお断りだが、日本よりもつと取扱ひよい島なら喜んで王様になるね。」
「さうですか、それではアロハ丸は如何に貧弱と雖も南洋を乗り廻るには十分ですから、少し日本で休憩してから更にもう一つ冒險の旅に出ませうか。今度は身内總出で行きませう……島さへ發見すれば直ぐあなたが王様で不二子さんが女王殿下、それに私が總理大臣といつたやうな役割を引受けるのですね。」

大河内はかういつて自分が「身内總出」といつた言葉を不二子嬢はどう受取つたかと思つて、顔を赧らめながら彼女の顔を覗いた。彼女は彼に微笑を以て答へた。

アロハ丸の機關は機關室で動き始めた。間もなく船は徐に夕日を受けて赤くなつた波の上を滑り始めた。ヤクキ島から吹いて来る微風は樹木や名の知れない草花の香氣を送つて来るやうに感じられ、それがお去らばを告げるやうに思はれた。島近くの海鳥は天に輪を描いて今日本へ向はんとするアロハ丸を見送つた。此時船の下からジョウジが葡萄酒の瓶やコップをお盆の上に載せて甲板へ上つて来た。大河内は微笑しながらジョウジに叫んだ。「此奴は老衰の魔酒ぢやあるまいな。ジョウジは答へた。「青春の靈酒ですが決して心配になる程強いものでは御座いませぬ、どうぞ幾杯もお飲み下さい。」夕日は段々とかきつて行つた。波の色も赤が薄らいで薄黒色に變じた……甲板の上では冒険隊の一行が酒井照人を取り圍んでみな沈黙のうちにヤクキに告別をした。これを譬へると芝居の三幕目の幕がするすると落ち見物席の燈火がぼつと點いて、見物人は現實の場面がいよいよ展開するといふことを意識してぼつと一息ついたやうであつた。

大河内は無言に不二子嬢の手をかたく握りつめた。不二子嬢は彼に手を握られながらいつた。「これからもう一つの冒険が始まりますね。」

「さうですよ。」と大河内は彼女に答へた。

幻島ロマンス 終

昭和四年九月一日印刷
昭和四年九月三日發行



世界大衆文學全集第卅二卷
幻島ロマンス

譯者 野口米次郎
發行者 山本美
印刷者 竹内喜太郎
東京市芝區愛宕下町四ノ六
東京市牛込區榎町七番地

發 兌

東京市芝區愛宕下町
四丁目六番地

改 造 社

振替口座東京八四〇二番
電話芝 (43) 自一一二一
至一一二四番

(日清印刷株式會社印刷)



